

42048

教科書文庫

4
810
41-1933
200030
2352

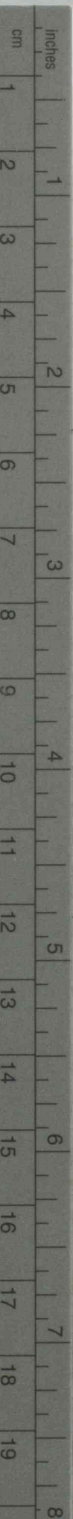
5.8
1933

Kodak Gray Scale

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

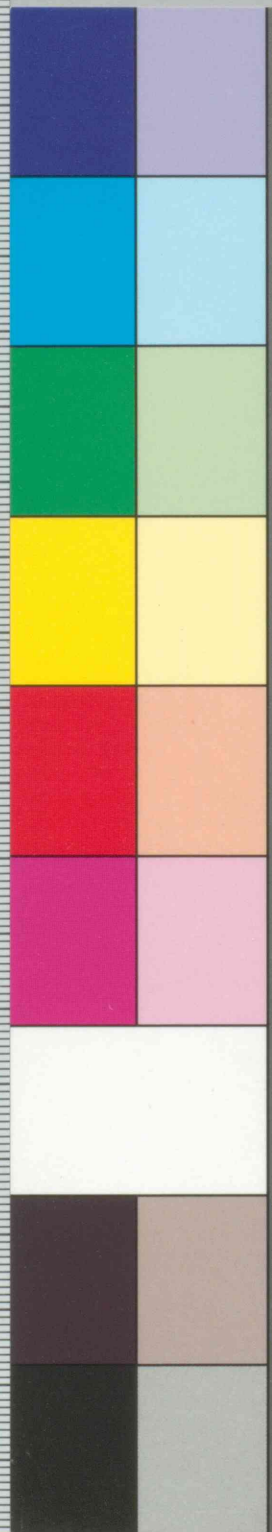
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Ig1
資料室

東京大学
文学部
国文学科

純正國語讀本

三才堂
新刊版

巻七



3759
I91

用科文漢語國校學中 日一十二月二年八和昭
用科語國校學業實 日一月九年八和昭

濟定檢省部文

文學部編纂部編

純正國語讀本



編輯田中幸生及部



(照參 政 類 二二)

筆谷蓋高(藏寺草淺) 治退朝政類

源三位頼政が怪鳥鶴を退治して、主上の御
 櫓を鎮め奉つたことは本家物語や謡曲に有
 名である。頼政が只たの一矢に射とまれ
 て、鶴は、紫宸殿の上を掩つた黒雲の中
 から落ちて来る。頼政の耶麻猪ノ早太が、す
 さまず駆け寄つて留めの一刀を刺し通す。
 の圖はその利形を描いたもので、東京淺草
 の淺草寺觀音堂の奉納額である。桐板念箱
 地に、極彩色で描いたもので、壁八尺九
 寸、横一丈八寸一分の大作である。作者高
 橋分は名を一雄、屠龍翁と號し、英一蝶の
 流れを汲み、狩野派、古土佐派の畫風をも
 合はせて一家を成した畫家である。文久六
 年歿、年七十五。

頼政の鶴退治

純正國語讀本卷七

目次

一 國語の愛護……その一……………一

二 國語の愛護……その二……………七

三 國語の愛護……その三……………一六

四 吉野山……………吉田絃二郎……………三

五 古今集より…………………………三

六 アルプス、ロッキーの思出……その一…横 有 恒(據)……………三五

七 アルプス、ロッキーの思出……その二…横 有 恒(據)……………四〇

八 日野山……………鳴 長 明……………四

九 人間生活と自然……………吉 江 喬 松……………四九

一〇 海三題 英

 元旦の挨拶 白鳥省吾

 海の風景 堀口大學

 月かゝりて空に 福田正夫

一一 西郷と大久保 山本有三 五

一二 世界大戦争 その一 七

一三 世界大戦争 その二 七

一四 媾和會議の結果と帝國の前途 西園寺公望演説 五

一五 五重塔 幸田露伴 九

一六 塔影 河井醉茗 一七

一七 田澤湖遊記 その一 一〇

一八 田澤湖遊記 その二 一九

一九 芳流閣 瀧澤馬琴 一七

二〇 心機一轉 芥川龍之介 一四

二一 才藝 (十訓抄) 一四

二二 頼政 世阿彌 一四

二三 競が事 (平家物語) 一五

二四 理想的生活 大西 祝 一三

二五 倫敦の二大記念 高田早苗 一六

二六 都市美論 佐藤功一(據) 一七

目次終



純正國語讀本 卷七

一 國語の愛護 その一

こゝに獨立した一つの國があつて、其の國をそのまゝ維持して行き、或は更に進んで一層立派なものに仕上げて行くについて、國民の愛護せねばならぬものが、澤山あるであらう。先づ第一に國體といふものがある。次ぎには國民が祖先から傳へられた淳風美俗といふものがある。それから建築、繪畫、彫刻、其の他の古藝術など、いろいろあるであらうが、吾々が先祖から受け傳へて、思想傳達の機關として調法して居る國語といふものも、國民の愛護しなければならぬ最も大切なるものの一つであらう。抑も國の言葉

淳風美俗

國語は其の國の文野の程度を示すものである。國の過去、現在、未來を示すもので、或程度まで國運の消長を支配し暗示するといふ事も出来るであらう。

現代の我が國語を見ると實に亂脈を極めて居る。殊に甚だしいのは外國語の濫用である。

- Alps
- Rhine
- Lion
- Swan
- Neige
- Union
- Cascade
- Parisian

といふものは其の國の文野の程度を示すものである。其の國の「國となり」を示し、嗜みを示すもの、人格に對していへば一種の國格を示すものである。従つて大きく云へば、國語は其の國の過去、現在、未來を示すもので、或程度まで國運の消長を支配し暗示するものといふことも出来るであらう。

さて現代の我が國語を見ると、實に亂脈を極めて居る。殊に甚だしいのは外國語の濫用で、此の頃は山や川の固有名詞にまで、日本アルプス、日本ラインなどと云つて、外國名をつけることが流行つて居る。殊に派手を競ひ流行を追ふ化粧品や飲料などの名稱に至つては、ライオン、スワン、ネイジユ、ユニオン、カスケード、パリジャンなど云つて、西洋言葉でなければならぬやうにすらなつて居る。これは多分、文化の程度に於いて西洋が優れて居るから、後進の日本がその眞似をするといふのであらう。けれども國民と

して國語を向上させる上からいへば、吾々は成るべく斯ういふ事のないやうに努力すべきである。殊に西洋諸國が、自分の國言葉を愛護して、立派に成立たせよう、發達させよう、外國の言葉は、よくよくの事情のない限りは使はないことにしようとし、心掛け、そして其の心掛の爲めに其の國の言葉が立派になり、言葉の立派になることによつて、國の面目も揚つて居るのを見ると、吾々は尙更我が國語を愛護する必要を感じざるを得ないのである。

遠い昔の事をいふと、今から二千數百年前に於いて、すでにギリシャでは、文章、説話の兩方に通じて、外國語の濫用を控へるやうに、その道の學者達がやかましく云つて居た。イギリスでは、文章、演説などに外國語を濫用する事をバアバリズム即ち夷振オビヤンと云つて擯斥して居る。フランスの國語自慢は名高いもので、音樂的の響

イギリスでは文章演説などに外國語を濫用する事を (Charbarism) バアバリズム即ち夷振、

野蠻語法と云つて擯斥して居る。

Friedrich

(1712-1786)

普國の名君

きがあるとか、國際語としてフランス語に優るものがないとか云つて誇つて居るのは、周知の事實である。ドイツでもフリードリッヒ大王の時代までは、佛國を崇拜して、氣の利いた文人は大抵フランス語を使つて居たが、其の中にドイツ語を守り立て磨き上げようといふ運動が盛んに起つて、段々國言葉を磨き上げた結果、土くさい獨逸語が文學的、哲學的の立派な言葉となつて、高尚難解なる思想を確實に現はす點に於いて、ドイツ語に優るものがないとまで云はれるやうになつた。又、ロシヤの如きは文學史上の新參國であるが、それでも人の心の微妙な變化の影を寫す點に於いては、世界の國語のいづれにも優つて居ると、自らも言ひ人も許す程になつて居る。ツルゲネフがフランスで客死する時、臨終の床から故國の作者に遺言して「純粹なロシヤ語をいつまでも正確に保存して貰ひたい。」と言つたのは名高い話であるが、外國に於ける國

Turgeneff
(1818-1893)
露西亞の文豪

語尊重の意氣は、これによつて其の一斑を知ることが出来る。

これらの例を見ると、日本語も吾々名々の心掛次第で、世界一の言葉に磨き上げることが出来るであらうがそれについて第一に必要なのは、國語の主權確立といふ事で、従つて外國語に國語の主位を犯させる事は深く警めねばならぬ事である。無論外國語を使はねばならぬ場合もあらうが、それはよく／＼の除外例、例へば外國語が國語の向上を助け得る場合、もしくは國語が外國語を婢僕使し得る場合のみに止めて、其の外は出来るだけ國語を用ゐて、國語を立派に磨き上げるやうに心掛けねばならぬ。

以上は外國語が國語の主位を犯し、國語の純粹味を損ふ場合の例であるが、近頃はまた地方の俗語が頻りに入り込んで來て、國語本來の意義や趣致に、一種の不健全な變化を與へて居る。例へば、

日本語も吾々名々の心掛次第で、世界一の言葉に磨き上げることが出来るであらうがそれについて第一に必要なのは、國語の主權確立といふ事で、従つて外國語に國語の主位を犯させる事は非常に警めねばならぬ事である。

近年「トテモ」といふ詞が「非常に」といふ意味に使はれ始めて、それが恐ろしい勢で流行してゐる。また「私達」といふ言葉が昨今全国的に流行してゐるが、本來「達」は今の「方」といふのと同じく、敬意の添うた複數の接尾語で、いはゞ「皆様方」といふ意味である。古事記や祝詞、宣命、其の他の古典を見ると、よく其の原意がわかるが、神達、佛達、親王達、王達、君達、親達、先達など云つて、古文の使ひざまは、皆目上の神佛とか、皇族とか、親とか、師とか、少なくとも尊敬すべき地位にある人を指す場合にのみ使はれてゐる。今日の流行用語例は、之れを逆まにして自分に加へたので、恐らく「オレダチ」「オイドン」などいふ俗語や方言から轉じて來たのであらう。俗語、方言から轉じたから、必ずしも悪いといふのではないが、今のところ何となく耳障りて、國語を不純にする嫌ひがあるやうに思はれるからいふのである。とにかく今日は、實に言葉が複雑で、そして亂脈な時である

が、かういふ時代に於いて、國語を愛護する爲めに、言ひかへると國語を少しでもよくする爲めに、吾々はいかなる態度を取るべきであらうか。

二 國語の愛護 その二

吾々は國語に對する今後の處置振について、成るべく正しくし、美しくし、豊かにし、而して統一あるものにするといふ處に、根本の標準をおきたいと思ふ。先づ第一に正しく規則に合ふやうにしたい。次ぎには規則に合ふのみならず、進んで、美しい、味はひのある、立派なものにしたい。其の次ぎには更に進んで、趣味を豊かにしたい。但しいかに豊かで、變化に富んでも、チリ／＼バラ／＼では面白くないから、最後の要求として、纏まつた統一のあるものに

吾々は國語に對する今後の處置振りについて、成るべく正しく、美しく、豊かに、そして統一あるものにする、といふ處に根本の標準をおきたいと思ふ。

合法合格は言語文章の第一義

したいといふのである。第一に國語を正しくするといふのは、例へば、「御都合よろしいの時御宅に行きます。」といふ文章があつたならば、それは西洋人まがひの不純な言葉遣で、正しくは「御都合の御宜しい時、御宅へ伺ひます。」といふべきである。と云ひ正し、這次の内閣と書く者があれば、それは死語の拙い使用で、正しくは平易に「今度の内閣」といふべきであるといひ、

「季節によつて食物の選み方に多少の注意を要する。」

といふやうな文章があれば、それでは不精確で、食物の選み方に注意を要せぬ季節もあるやうに取られる恐れがあるから、正しくは、「食物の選み方は、季節によつて多少變へねばならぬ。」といふべきであると注意する類をいふのである。

すべて合法合格は言語文章の第一義で、正しい言表は美しい言

である。

國語を美しく味はひのあるやうにすること。

頬が落ちさうだ

道草を食ふ。舟をこぐ。

表の土臺となるべきものである。吾々が、まづ正しい國語國文、正格合法の言表といふ點に着眼し、讀書作文、談話のすべてにわたつて、常に邪路を去り正路に就くやうに努めねばならぬといふ理由はこゝにある。

第二に、國語を美しくし、味はひのあるやうにするといふのは、例へば、うまい物を食べたといふ事を言ひ表はす場合に、「うまかつた」といへば意味はわかり文法にも合つて居るが、唯だそれだけで、人を動かす味はひといふものがない。それを「頬が落ちさうだ」といへば、意味がわかるばかりでなく、一種の面白味が加はつて來るであらう。「途中で遊んで居た」「居睡をした」といへば、平明合法といふだけであるが、「道草を食ふ」「舟をこぐ」といへば、特別の味はひを感じさせられる。何のためであるか。それには、いろ／＼の理由があらうけれども、そのおもなる一つは、思ひ寄せた比喩が、奇抜でしか

常夜往く。

も妥當である爲め、もう一つは一事に二事を疊み込む所から、簡潔で同時に含蓄が深くなる爲めである。
「古事記」の天の岩戸入の段に「常夜往」といふ句がある。天照大御神が天の岩戸に御隠れになつたので、永久の夜がつゞいた、といふ事を現はしたのであるが、「夜」といふ怪物の黒い姿が、今日も明日も明後日もとのツしつと限りなく續いて行くといふ恐ろしい不安の心持が、此の三字五音の中に、いかにも面白く、簡潔に、しかも活き／＼と現はされてゐるではないか。

舷々相摩す。

昔の言葉文章のみならず、今の中でも同じことである。日本海大海戦の戦報に「舷々相摩す」といふ文句があつて持てはやされたが、事實は、舟端と舟端とが摩れ合つたといふだけで、言ひ表はし方によつては、一向つまらない事になるのであるが、それが「舷々相摩す」といはれたので、何とも云はれぬ面白さを見せて來たのである。

國語を豊かにすること。
現代の口語を本位とし基調として、廣く衆美を總攝する。

かやうに我が國には、古今に通じて美しい言葉が無數にある。そしてそれは磨けば益、よくなるべき可能性を有つて居り、又言葉を磨けば國民の生活が美しくなり、國の位が高くなるといふのである。お互が出来るだけ注意して此の國語を立派に守り立て、行くことは當然の務めといはねばならぬ。

第三には、國語を豊かにせねばならぬ。今後の國語國文は、大體に於いて、現代の口語を本位とすることになるであらう。これは當然の事であるが、唯だ口語の一方に執着して他の諸要素を排斥するといふことでは、將來の國語を貧弱にし、狭小にする憂があるので、吾々は是非とも、現代の口語を本位とし、基調として、廣く衆美を總攝するといふ處に、標準をおきたいと思ふのである。

口語文の何たるかについては、いろいろの説がある。その中で最も普通なものの一つは、口語文は今の人の話す通りに書くべき

もの、文字通りに、口語そのまゝか、或は口語に少し磨きをかけた程度に書くべきもので、古語や外國語を取り入るべきものではないといふ考へで、此の考へを持つてゐる人達の中には、古語や漢語を取り入れると、いかにも取るべからざる餘所物を取つたかの如くに思ひ、或は敵に降つたかの如く、少なくとも口語文の純粹味を傷つけたかの如く思ふ人が澤山ある。又さういふ論者の中には、今の謂はゆる口語文の中には、内容の大部分を漢語や古語にして、ホンノ端々だけを今風に誤魔化すものがあると云つて非難する人がある。無論これにも一理のある事で、語尾のみの口語文は、決して眞實の立派な口語文ではない。例へば

「我が國は振古より瑞穂國と稱せられ、隨所に嘉穀穰々として野生した。」

といふが如きは、最後の二字が口語式になつてゐるだけで、あとは

口語文の意義、
本質、理想を談
話のまゝの純口
語、乃至準口語
に限るのは、自
ら低くし、狭く
し、貧しくし、
卑くする所以で
あつて、口語文
の前途を塞ぎ、
口語文を窒息
させるものであ
る。

多く漢語で、そして全體が雅文仕立になつて居る。是等は流行に乗つて口語文の眞似をしたもの、或は漢文に降参した一種の不純な口語文ともいふべきもので、之れを眞の口語文にするには、耳近い詞を用ゐ、漢文がかつた文脈の凝を揉みほごして、前後一貫した調子に整ふべきであらう。かういふ似而非口語文が嘲られるのは尤もの事であるが、しかし口語文の意義、本質、理想を談話のまゝの純口語乃至準口語に限るのは、自ら低くし、狭くし、貧しくし、卑くする所以であつて、口語文の前途を塞ぎ、口語文を窒息させるものである。吾々は、口語文は、その理想的本質からいふと、唯だ口語を本位とし、口語に基調を置くといふだけで、其の本位を犯さず基調に合し得る限りは、古今東西のあらゆる言語文體を攝取して自分を肥やし豊かにすべきものであると考へる。それは父祖の遺産を子孫が繼承する場合と同じことである。吾々は親の財産を

受け繼いで、自分の理想を實現する爲めに、それを活用し、尙ほ其の上^上に他からいろ／＼の要素を取り入れ、成るべく増殖して子に傳ふべきであらう。而して子は同様の方法により更に増殖して孫に傳へ、孫は更に／＼増殖して曾孫に傳ふべきであらう。新しい國語國文樹立の消息も同じ事で、唯だ其の基調をはずすか、外さな^いかが問題である。いかにして其の基調を外さずして多くの他のものを攝取し得るかが問題になるのである。

然らば他の要素を我が基本の調子に化する呼吸はどうかといふに、それは向うの特色を取りながら、其の角^{かど}をたふして我れに反^{そり}を合はさしめるにある。例へば外國語を日本文の中に挿入する場合ならば、外國語の主位を奪ひ角をたふして日本文に馴染ませればよいので、同じ道理で、古語を現代口語文の中に加へる時にも、古語の主位を奪ひ角をたふして口語の基調に馴染ませればよい

他の要素を我が基本の調子に化する呼吸は、向うの特色を取りながら、其の角をたふして我れに反を合はさしめるにある。

のである。そしてそれが寧ろ我が口語文の大を成し、變化を添へ、趣致を豊かにする所以である。また是れが實際各時代の我が文學の常に試みて來た事であつた。例へば『平家物語』の一節に、清盛が熱病に罹り、大苦しみをして死ぬるところを描いて、

「もしや助かると、板に水を置きて臥しまろび給へども、助かる心地もし給はず、同四日の日、悶絶^{もんぜつ}躋^{びやう}地^ちして、つひにあつち死^しぞし給ひける。」

と言つて居るが、此の中には、少なくとも性質の違つた三種の言葉が交つて居る。一つは「臥しまろび給へども」し給ひける」といふ調子の王朝語である。一つは「悶絶躋地」といふ漢語である。そしてもう一つは「あつち死」といふ當時の俗語である。かやうに質の違つた三種の言葉が、各、それ／＼の特色を見せながら、仲よく並んで、一つの調和した空氣を成り立たして居るではないか。これは王

朝語を主位に立て、他の二つが反を合はせた結果であらうが、かういふ調子で行けば、現代口語文の中に古語を取り入れ、或は外國語や方言を取り入れても、少しも差支のないことと思ふ。

三 國語の愛護 その三

次ぎには様式の違つた文章の調和であるが、是れも昔から時代の變はり目毎に、始終試みて來たことで、かくして前代の、或は外國の文體を取り入れたればこそ、我が新時代の文章が、古語の品位と、新語の活躍味と、外國語風の珍らしさと、國風の目安さとを兼ね備へて、趣味様式が段々豊富になつて來たのである。一體、新舊國語の裂け目は、文學の上では、まづ地の文と對話との對立に現はれるのであるが、國語史上で、言語と文章と、口言葉と目言葉との一致し

様式の違つた文章の調和。

たのは平安朝までであつた。例へば源氏物語の一節に、

「物語は神代より世にある事を記しおきけるななり。日本紀などはたゞ片そぼぞかし。これらにこそ道々しく精しき事はあらめ。とて笑ひ給ふ。」

といふのがある。これは鎌倉時代ならば、精しい事は候ふらむとて笑ひ給ふなど云ふべきところであるが、それを對話の詞でもあらめといひ、地の文でも給ふといつて、兩方とも完全に雅言で通して居るところが、まだ言文未割の純なる姿と見るべきところである。これが鎌倉時代になると、言と文とが背を向け始めたが、同時に、各の姿を其のまゝに保ちながら、歩み寄り馴染み合つて來た。

例へば「平家」の「競が事」の中に、

「宗盛卿使者を立て、聞こえ候、名馬を賜はつて見候は、や」と宣ひ遣はされたりければ、伊豆守の返事には、さる馬を持ちて候ひし

平安朝の文章は對話と地の文と兩方とも完全に雅言で通して居る。言文未割の純なる姿と見るべきところである。

歩み寄り馴染み合ふ。

宗盛 平清盛の次男
伊豆守 源頼政の子、仲綱

を、此程餘りに乗り疲らかして候程に、暫らく勞はらせんが爲めに田舎へ遣はして候と申されければ、さらんには力及ばずとて、其の後は沙汰無かりけるが、多く竝居たりける平家の侍共、あつばれ其の馬は一昨日も候ひし。昨日も見えて候ふ。今朝も庭乗し候ひつるなど、口々に申しける……

とあるが、簡單ながら、對話の詞を鎌倉語の「候」で行き、地の文を平安朝語の「なり」「けり」で行き、兩方歩み合つて一種の調和した文體を成したことが解るであらう。是れは「なり」「けり」と「候」とを處きらはず入り組ませたので、一種の雜居的混融的調和ともいふべきものであるが、此の「なりけり式」と「候式」とが、混融せずに隣接して、しかも一種の調和した姿を見せたのは、室町時代の謠曲である。例へば、鉢の木の最初の一節に、

次第行方定めぬ道なれば、行方さだめぬ道なれば、こし方もいづ

鎌倉時代の文章は對話を「候」で行き、地の文を平安朝語の「なりけり」で行き、兩方歩み合つて一種の調和した文體をなした。室町時代の文章は「なりけり式」と「候式」が混融せずに隣接して、而も一種の調和した姿を見せてゐる。

くならまし。ワキ詞是れは一所不住の沙門にて候。我れ此程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなりて候程に、先づ此度は鎌倉倉にのぼり、春になり修行に出でばやと思ひ候。道行道行信濃なる淺間の嶽に立つ煙、淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くやあらしの大井山捨つる身になき友の里、今ぞ憂世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏のいた鼻や、佐野の渡りに着きにけり、佐野のわたりに着きにけり。詞詞急ぎ候ほどに是れははや上野の國、佐野のわたりにつきて候。

とあるが、地の文や節ふしの附いて居るところを「なり」「けり」本位の王朝語にし、詞の部分部分を「候」本位の鎌倉語にし、之れを隔置的隣接的に引き放し對立させてそれで立派な一種の調和が出来て居るところが、特に面白いのである。

個々の言葉が前に云つた通りであり、そして複雑な句や章も此

の通りで、それが已に國語史上の實證を経て居るとすれば、一つの文體を本尊とし、其の本具の様式を基調として、趣致様式の異なる他の數多の語様文體を攝取し、融合し、臣僕化する事は、今後の國語についても、決して不可能な事ではあるまい。

吾々の言葉を立てるに護り立てるのが、取りも直さず吾々個人銘銘を立派にする所以であり、同時に國をも輝かす所以である。

要するに、國語は先祖から傳へられた大切な財産の一つで之れを立てるに維持して、成るべく豊富にし、善美にするのが、子孫たる吾々の義務である、また吾々の言葉を立派に護り立てるのが、取りも直さず吾々個人銘々を立てる所以であり、同時に國をも輝かす所以であるといふのである。然らば、亂脈を極めて居る今日の國語に對して、どうすればよいかといふに、大體四つの方針に歸するであらう。それは第一には、語法文法に合ひ、少なくとも正しいといはれる程度にする事、第二には、正しきが上に更に美しく磨き上げる事、第三には、自ら狭く限らずに我が本領の基調を立てるに立

て、これに合し得る限り成るべく多くの要素を取り入れて豊かな姿のものに生し立てる事、第四には、豊かな中に統一のあるものに發達させる事、この四つで、要するに此の標準により、我が國語を正しくし、美しくし、豊かにし、纏まりのあるものにして、國語を光らせた、國をも光らせた、そして少なくとも此の點から見、我が國を世界の第一位に置きたいといふのである。

『國語の愛護』

四 吉野山

吉田 絃二郎

大和めぐりは廢墟の遍路である。滅びたるものを弔ふ挽歌の旅である。

三輪、畝傍、なつかしい名である。麥畑、水田の中の古い町、そこにもし雨が降るならば、さらに情趣の深いことであらう。

吉田絃二郎

文學者

名は源次郎

佐賀縣の人

明治十九年生

大和めぐりは廢墟の遍路である。滅びたるものを弔ふ挽歌の旅である。

畝傍からは電車になり、道は吉野へと上り坂になつてゐる。小山また小山を縫うて走る。碧珠のやうな吉野川の流れを見出だすと、間もなく電車の終點である。

吉野川の長い鐵橋を渡ると、やがて人家が盡きて急坂にかゝる。左手に吉野川を隔て、上市のいかにも落ちついた町の姿が眺められる。

私は曾てシモンズの伊太利紀行を讀んだ時、一つの町を生けるものとして見た彼れの見方を面白いと思つたことがあつた。ローマの町、フロレンスの町、ナポリの町、皆それ／＼の脈搏を持ち、感覺を持つてゐる。

吉野川を隔て、春光を浴びてゐる山の町、上高市を見おろした刹那、私はシモンズの言葉を思ひ出さずには居られなかつた。私は曾て大和から伊賀に入つた日、木津川沿ひの修竹に圍まれた小

Arthur Symonds
英國の文學者
(1840-93)
Rome
イタリーの首都
Florence
イタリー中部の都會
Napoli
イタリー南部の都會

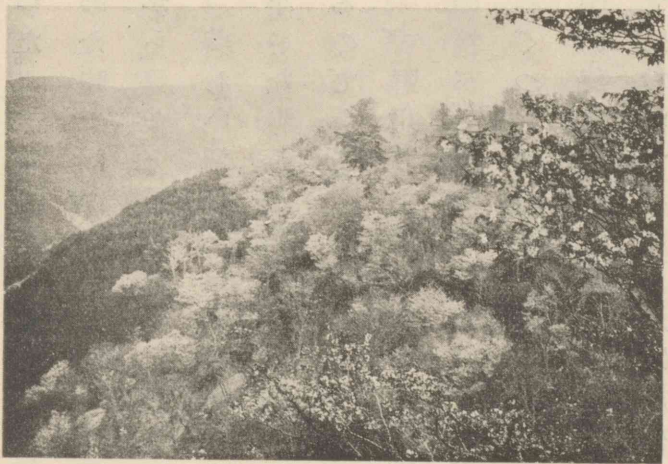
さな村を見て、尊い藝術に對するやうな感激を経験したことがあつた。去年高野へ詣でた折、紀伊見峠のあたりで河内の山村を眺めた時も、ほゞそれに近い感興をそゝられたことがあつた。吉野から見た上市の眺めも同じそれであつた。
美しい静かな自然の中にひとりてに作り上げられた小さな村、小さな町が、人間の手に作られた藝術に幾倍する尊さを持つて居るのである。

吉野川の上流に青い山が聳えてゐる。伊勢の山である。幾聯の筏がしづかに美しい吉野川の流れを下つてゆく。道は山腰をめぐつては、川を失ひ川を見出す。急坂を登りつくしては、やがて深い谿に沿うて緩やかな道となる。櫻の老木が、先づ道を掩ふまてに咲いてゐる。道は尾根を傳うて一上一下して走る。下の千本、中の千本は丁度見頃であつた。

道は山腰をめぐつては、川を失ひ川を見出す。

宿場の家々を埋めて雲の如き花が薫つてゐる。

吉野山は花の山であり、同時に人間哀史の山である。



山の背を一筋の赭土道が走つてゐる。道を挟んで吉野の宿場

があり、宿場の家々を埋めて雲の如き花が薫つてゐる。谿も峯も花である。

下 義臣村上義光の墓は道傍の
の 高い丘の上にある。このあたり
千 からいよ／＼吉野の花らしい花
の 眺めが始まる。「歌書よりも軍
本 書に悲し芳野山」の跡も、このあたりより始まるのであらう。

野朝五十年の御所跡に立てば、花は旅人の悲しみをこめて散りに
吉野山は花の山であり、同時に人間哀史の山である。吉

散る。

宿に着いたのは五時過ぎであつた。出来ることなら今日のうちに奥の西行庵をたづねて、明日は如意輪寺あたりの花を見て、成るべく人出の少ないうちに山を下りたいと思つたので、宿に着いて休む間もなく、更に山を登ることにした。櫻の坊、竹林院の前を通り過ぎて、天王橋あたりからは、さすがに昔のまゝの山の宿の面影が残つてゐる。道は再び急峻になる。宗信法印の輪塔が暗い木立の中に、冷たい苔に包まれて立つてゐる。

宗信法印の墓から二三丁登つたところで、奥から木を卸して來る杣人達に逢つた。丸木をそのまま、車輪にした小さな車の上に、吉野の杉材を載せて、山を下つて來るのであつた。有名な吉野杉である。一間物と二間物とあるが、いづれも氣持のいゝほどよく、枳が通つてゐる。私は尋ねた。

宗信法印
吉水院の住僧
後醍醐帝、吉野
に駐紮の折僧兵
を率ゐて警護し
奉る。

花は霧の如く、
山の背を走る道
と谿とを包んで
ゐた。

佐藤忠信
源義經の臣
陸奥の人

「高野山は見えますか。」
「この上の山から見えます。あれが金剛山、葛城山……それからもう少し左手に高野が見える筈です。」
私は杣人に教へられたまゝに山を登つて行つた。幾度か立ちどまつては麓の花を眺めた。谿は暮れかゝつてゐた。花は霧の如く、山の背を走る道と谿とを包んでゐた。吉野川であらう、暮色につゝまれた幾重の山のかなたに銀の如く光つては、やがて落日と共に暮れて行つた。

そこらにはまだ梅が咲いてゐた。櫻はまだ堅く蕾んでゐた。花屋倉は急峻な坂を擁して俯瞰する峠の足溜りである。昔はこゝに山門の様なものでもあつたのであらう、佐藤忠信が吉野の僧兵を防矢した場所であると傳へられてゐる。さらに二三丁行つたところに水分神社がある。古風な建築である。軒も庇も欄干

も苔むしてゐる。水分神社から更に坂を攀ぢて數丁登つたところで、私は若い二人づれの杣人に逢つた。

「これから奥の西行庵まで行けませうか。」

「まだ十五六丁はありますがな。それに行きついても、あつちは暗い山の中ですから、今日は山を下つた方がいゝでせう。」

私は杣人と別かれて、しばらくそこに立つてゐた。

春の夜の満月が伊勢の山に出た。落日が高野あたりの山のかなたに沈んで行つた。私は暫らくの間、吉野の奥の満月と落日とを、たゞひとり靜かに味はふことが出来た。燕村の月は東に日は西にの句を思ひ出さざるを得なかつた。

私は西行庵を斷念して、ひたぶるに吉野の奥の満月に眺め入つた。

谿は霧に包まれてしまつた。月の光はまだ谿の底までは届か

燕村

俳人

姓は谷口氏又は
與謝氏を稱す
天明三年歿
年六十七

芭蕉
元祿の俳聖
松尾宗房
伊賀の人
元祿七年歿
年五十一

麓は霧の海につ
つまれてゐた。
救はれたやうな
快さを感じた。

なかつた。風の音も絶えた。私は坂道の傍らにしやがんだ。そこの一筋の道を曾て西行が歩み、芭蕉が辿つたであらう。かう考へると、薄闇の中の小徑も尊かつた。
どこの家でも花見の客達が夜の更けるまで騒いでゐた。私は寢床についたが、どうしても眠れなかつた。夜が更けて、月の光りが眞冬のやうに澄んで來ても、人々は唄をやめなかつた。私は一刻も早く夜が明けて、この騒がしい環境から逃れたいと思つた。夜の明けるのを待ちかねて、私は起きた。顔も洗はずに、逃げるやうにして宿を出た。私ははじめて救はれたやうな快さを感じた。道には眞白に霜がおりてゐた。
昨日夕方歩いた坂道を、再び花屋倉の方へのぼつて行つた。麓は霧の海につままれてゐた。奥の千本に近く、金峰神社がある。役の行者の道案内を勤めたといふ山神の木像が石磴の傍に祀ら

梅室
江戸末期の俳人
櫻井氏
加賀の人
嘉永五年歿
年八十四

露とくくく
ろみに浮世すま
がばや
(甲子吟行)

れてある。中老の宮守が一人焚火をしてゐた。そこへ七八人大峯詣りの道者達が裏の山道を下つて來て、一緒に火にあたつた。私はその人達に別かれて、更に急な坂を登つて行つた。小鳥の聲が聞こえて來た。

大峯への道から右に岐れて、杉の木立の中を四五丁も歩いて、谿に下つた所に苔清水がある。水は暗い木立の下をくゞつて五六尺の高さから落ちてゐる。木の傍らに梅室の手に成つた芭蕉の「露とくくく」の碑が立つてゐる。碑は苔につままれて文字のみ黒く沈んでゐる。何となく勿體ない心持もしたが、苔清水を手に掬



西 行 庵

んで漱ぎ飲む。

とくくの水から更に南へ一丁ばかり、山の腰に沿うて狭い道をゆくと、急に半段ばかりの地が展けて、周囲には縦が繁り、殊に櫻の老樹が多く繁つてゐた。そのやゝ平らな林間の片隅に、山を負うて西行庵が立つてゐる。辛うじて人一人の膝を容るゝに足るほどの草の庵である。眺むるに、佇むに、たゞ涙が流るゝばかりの尊さを覺える。

こゝに来て、西行が「よしの山やがて出でじとおもふ身を花ちりなばと人やまつらん」の歌を思へば、西行の悲しい決心が眼に見えるやうで、草も清水も歎歎してゐるやうな氣がする。六尺の大男西行が吉野の奥の地に獅噛みついて泣いてゐる悲しさが、旅人の腸にこたへて来る。

恐らく芭蕉もこゝに佇んで泣いたであらう。何といふ偉大な

二つの寂人の影が、かつてその草の上に投げられたことであらう。

再びとくくの水を掬ひ、私は如意輪寺の方へと志して山を下った。

五 古今集より

在原業平

おほかたは月をもめてじこれぞこの

つもれば人の老となるもの

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

なにかは露を玉とあざむく

在原業平

阿保親王の五男

六歌仙の一人

元慶四年歿

年五十八

遍昭

六歌仙の一人

俗名長峰宗貞

寛平二年歿

年七十五

小野小町
六歌仙の一人

色見えでうつろふものは世の中の

小野小町

ひとの心の花にぞありける

大伴黒主
六歌仙の一人

大伴黒主

春雨の降るは涙かさくら花

ちるを惜しまぬ人しなければ

紀貫之

今年より春知りそむる櫻花

散るといふことは習はざらなむ

同

さくら花咲きにけらしも足曳の

山の峽かまより見ゆるしらくも

凡河内躬恒

紀貫之

古今集の撰者
土佐日記の著者
天慶九年歿
年六十五

凡河内躬恒

古今集の撰者
延喜七年歿
年四十九

紀友則

古今集の撰者
延喜五年歿
年六十一

是貞のみこの家
の歌合によめる

文屋の朝康
吹くからに秋の
草木のしをるれ
ばむべ山風をあ
らしといふらむ

壬生忠岑

古今集の撰者
康保二年歿
年九十八

春の夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やは隠るゝ

紀友則

古今集河集卷第八

秋哥下

これこそこの家の
歌合によめる
文屋の朝康
吹くからに秋の
草木のしをるれ
ばむべ山風をあ
らしといふらむ

傳紀貫之筆蹟

ひさかたの光のと
けき春の日に
しづ心なく花の散
るらむ

壬生忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ

鹿の啼くねに目をさましつゝ

藤原良房

年ふれば齡は老いぬしかはあれど

花をし見れば物思ひもなし

藤原敏行

歌人、書家
光孝、宇多、醍醐の御代の人
延喜七年歿

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

藤原敏行

風の音にぞおどろかれぬる

素性

素性

俗姓長峰玄利
清和より醍醐の御代の人

もみぢ葉のながれてとまる湊には

紅ふかき波やたつらむ

詠人知らず

昨日こそ早苗とりしかいつのまに

稲葉そよぎて秋風の吹く

同

木の間より洩り來る月のかげみれば

心づくしの秋は來にけり

坂上是則

坂上是則

歌人
延長八年歿

榎有恒

登山家
仙臺に生る
明治二十七年生

もみぢ葉の流れざりせば龍田川

みづの秋をばたれか知らまし

六 アルプス、ロッキーの思出 その一

榎 有 恒

Alps, Rocky

思ひ出に蘇つて來ては、吾々の胸を躍らせる。

鋭い山、穩かな山、親しい山、怖ろしい山、手を連ねて屏風の如く聳ゆる山、大空に孤高を持して寂寥を夢みてゐる山、かう考へて來ただけでも、私は手の下

山の姿は思ひ出に蘇つて來ては、いつも爽快な氣分に吾々の胸を躍らせる。目をつぶつてぢつと考へると、曾て踏破した幾十幾百の山岳が、それ／＼独自の個性を有つて群り迫つて來る、そのうれしさ心地よさを何に譬へよう。鋭い山、穩かな山、親しい山、怖ろしい山、手を連ねて屏風の如く聳ゆる山、大空に孤高を持して寂寥を夢みてゐる山、かう考へて來たゞけでも、私は手の下しやうのな

い狼狽を感じるばかりである。その競ひ起こる回想の中から、私は今アルプスとカナダ、ロッキーと、この二つの印象を語つて見た

しやうのない狼
狼を感じるばか
りである。
傳説や迷信の中
から一步も外へ
出ることの出来
ない人々。

南國の常春の風
景は繪のやうに
北の國の心を引
いた。
北の野の人々
は、あたかも巡

いと思ふ。

アルプスの峠路は、二千年も前から越されたものであるらしい。傳説や迷信の中から一步も外へ出ることも出来ない人々が、彼の大きなアルプスを越さうとしたのは、一種の驚異であるが、彼等を誘つて、眞夏でさへ雪に鎖されてゐるあの大山嶽を命にかへても越さねばならぬと思はしめたのは何であらうか。それは常春のイタリヤであつた。文化のイタリヤであつた。



(備 準 の 山 登) 恒 有 楨

南國の常春の風景は繪のやうに北の國の心を引いた。イタリヤの文化は、大波のやうに北の野の國にうち寄せた。そしてその北の野の人々は、あたかも巡禮者が聖地

禮者が聖地に憧
れるやうな心持
で、山の彼方の
國の空を慕つ
た。

Hospice
Saint Bernard

に憧れるやうな心持で、山の彼方の國の空を慕つたのである。アルプスを越えた冒険者の中には商人の群もあつたであらう。信心家の隊伍もあつたであらう。或はまた、學問や藝術を求めて行つたものもあつたであらう。或る時は、帝王の嚴めしい行列が越したであらう。或る時は、野心に燃えた軍勢が通つたであらう。そして彼等にとつては、谷を埋めて流れる、恐ろしく深い龜裂に刻まれた氷河の姿が、龍とも大蛇とも見えたであらう。彼等の中には恐怖と苦難と戦つて、漸く峠にさしかかり乍ら、雪崩の不意打に命を失つたものもあつたであらう。

峠には人助けのホスピスが建てられて、行旅に悩む人々を勞はつた。サン、バーナード犬が、頸に葡萄酒の小樽を下げて、雪に埋もれた旅人を救ひ出すといふ挿話は、このホスピスの出来事である。その中に幽かな細道を四頭立の郵便馬車が通ふ時が來た。ナポ

レオンの大軍をやるために立派な道の作られる時が来た。そして今は、この大山岳をば、越したことすら知らずに、汽車の中に眠つて往來の出来る時代となつたのである。

若緑と若草との
だんだら織のう
ねりが目も遙か
に見渡される。

(Giovanni)
Segantini
(1858-99)

史家の説によると、アルプスの名稱は、もと雪線下の牧場地帯を指したものであつた。現にスキスの山村では、その意味でこの語を用ゐてゐる。そこには山腹に若緑と草花とのだんだら織のうねりが目も遙かに見渡される。牧童の歌、牛の頸に揺れる鈴の音、そして谷の底に響く物凄しい雪崩。この山の愛に活きた名畫家のセガンティニはこのアルプスに在り、これらの音を聞き、これらの景を見て、どんなに尊い陶醉の生涯を送つたことであらう。

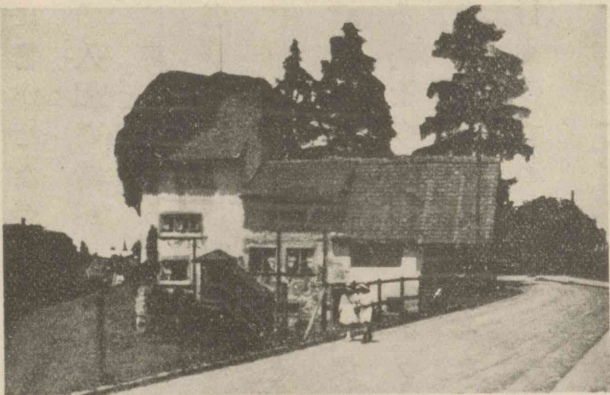
Zernatt
スイツス西南境
Matterhorn
Mt. Rosa
Weisshorn
Dame Blanch

夏のアルプスといへば、吾々は、まづスキスのツェルマットの村を想ひ出す。ツェルマットはマッターホルン、モントロローザ、ヴァイスホルン、ダンブランシュ等の、四千メートル系の峻峰に圍まれ

た谷合の僅かばかりの土地に押し込められた様な村である。この村は、畑地も殆んどない山間の事として、短い夏の間集まつて來る旅行者や登山者の落す金で、一年の

Chalet

山男の世界だといはぬばかりに、幅を利かしてゐる。



村山の西瑞

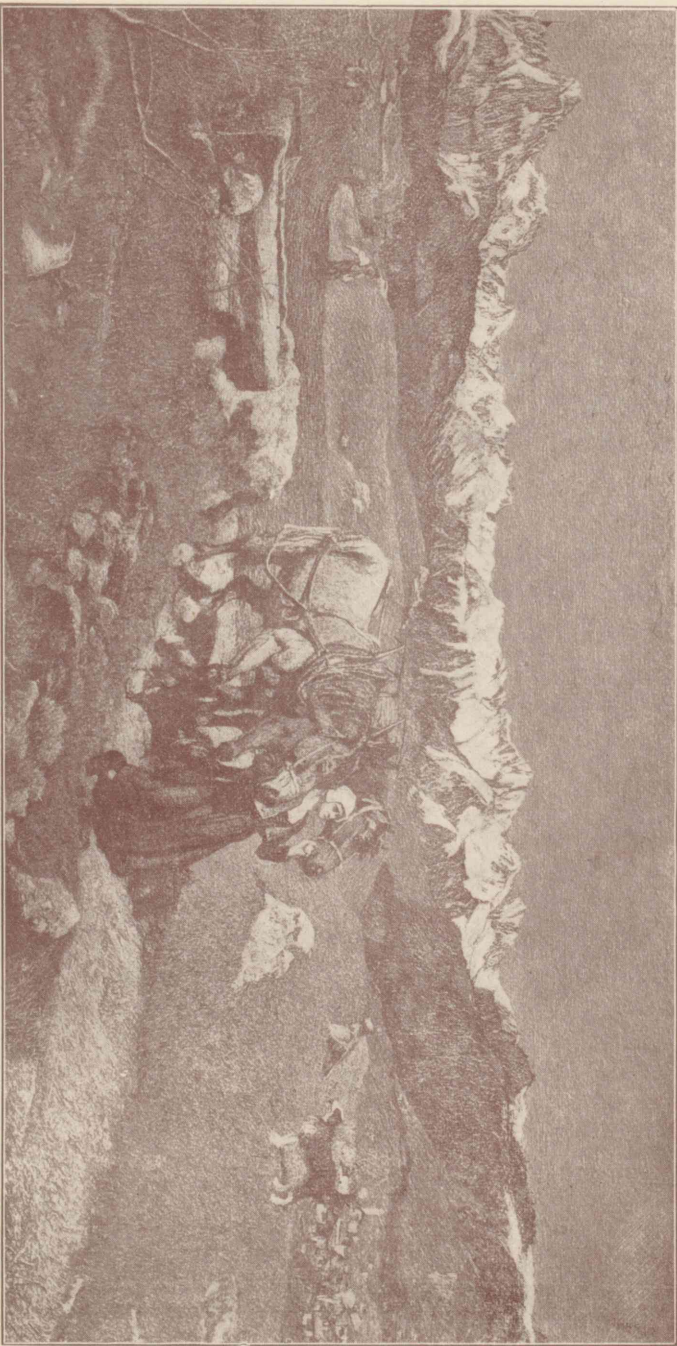
生計を立てゝある所であるが、町の兩側からはシャレの屋根が狭い道に覆さる様に張り出てゐる。その町が宵毎に一しきり華やかな人通りに賑はふ。日焼のした登山者が、重い靴を鳴らして、此處ばかりは山男の世界だといはぬばかりに、幅を利かしてゐる。派手な都會人のそゞろ歩きをガイドの一團が大きいパイプを口にして眺めてゐる。終日山麓に遊ばせた山羊の群れを、子供が連れて歸る。

山羊は銘々の家をよく覚えてゐて、小刻みの鈴の音を忙がしさうに響かせながら散つて行く。何といふ床しい光景であらう。入相の鐘が鳴るころには、マッターホルンが暗い森の上に金色に輝いてゐる。熱も焰もない光が高峰の山頂を染めて、底淋しい名残を惜しむ頃になると、山懐の谷にもイタリヤの野にも、靜かに休息の夜が降りる。そしてアルプスの山裾に散らばつた碧玉のやうな數々の湖水が、深い夕靄の中にこめられて、亂されぬ夢に耽る。その平和な夢を、ラインも、ポーも、ローンも、ドナウも、溪流となり、瀑布となり、淺瀬となり、淵となつて、河下の國々の野へと運んで行くのである。

七 アルプス、ロッキーの思出 その二

楨 有 恒

Rhein. R.
Po. R.
Rhone. R.
Donau. R.



(作ニイテツガセ) 春のヌアルプ

アルプスの書物

セカンチアイニはアルプスの山麓に育つて、アルプスの奇怪と壯麗とをカンブスの上に表現するために、尊い一生を捧げた畫家で、此の人出て、アルプスの美が始めて天下に紹介されたと云はれる。

セカンチアイニは伊太利領トレンチノ山中の貧しい大工の子として生れた。五歳にして母に死にわかれた。後父がアメリ

カへ出稼することになり、異母の姉の手に託されたが、彼れは姉の虐待に堪へがれて遂に其の家を逃げ出した。彼

の不幸は益々深刻になつて来た。その後佛蘭西へ志して行く途中、とある農村の百姓に窮餘を救はれ、暫らくそこに

ゐたが、畫を學ぶためにミランへ引返して来た。たま／＼不良少年と誤られて感化院に送られたが、畫才を認められ、

感化院を出て畫を學ぶやうになり、やがて海拔一千八百メートルのドロカ村に一家を持つて、毎日山に上つては、

の名山の寫生に専念した。一八九九年の秋は、吹雪を犯してシャイフベルヒの谿谷に上り、羊小屋に滞在して、雪を

溶かして飲みながら製作に努力してゐたが、遂に病を得て、エンゲルアインの高峰を眺めつゝ、この山中の羊小屋で永

眠した。一八九九年九月二十八日のことだ、年四十七であつた。傑作としては「生」「自然」「死」の三部作「歸郷」その他

が擧げられる。いづれもアルプスを取扱つたものである。

アメリカは原生のまゝの自然に、最近代的な設備を施して、悦んでゐる國である。

原始林の谷が際涯も無くつゞく。

森に埋められた溪谷と山と、そしてその間を縫つて走る長い長い鐵の線路とが、一脈の人の氣配をたゞよはせてゐる。

Athabasca

アメリカは原生のまゝの自然に最近代的な設備を施して、悦んでゐる國である。生地キチのまゝの森や野を切り拂つて、能ふ限りの人工に酔うてゐる國である。

吾々の乗つた汽車がロッキーマウンテンの山麓に入つた時の第一印象は實に忘れられぬものであつた。原始林の谷が際涯も無くつゞいて、その林の上に、思ひ切つた斷崖の山岳が、雪を戴いて聳えてゐる。連山といひたいが、谷が餘りに大きいので、孤立してゐるやうにも見える。こゝにはアルプスに見るやうな山腹の牧場もない。まして人の住むシャレや、村里は更にない。森に埋められた溪谷と山と、そしてその間を縫つて走る長い長い鐵の線路とが、一脈の人の氣配けいをたゞよはせてゐるだけである。

吾々は馬の背に數十日分の食糧を積んで、この道なき森を、ロッキーマウンテンの核心へと旅をつゞけたのであつた。アサバスカといふ河

Caravan
隊商

Camp
露營

近代生活の苦患
から逃れ得た喜
びを歌ふ。

に沿うて溯つた週日に餘るこのキャラバンの旅は、歴史のある國土では、幾百千年以前にとくに消えてゐる光景であつた。熊もゐる。鹿もゐる。馴鹿の群が河原に草を食んでゐる。其の間を終日乗馬をつゞけて後、適當な露營地を求めては幕營をして進んで行つた。忘れられぬのは、無数の星の輝く高い空の下で、キャンプの焚火の邊りに集まつた一行の人々である。其の中には牧童もゐた。スミス人もゐた。この人達の謠ふ歌は多くは便利な都を思慕するものであつた、さうでなければ、暫しなりとも近代生活の苦患から逃れ得た喜びを歌ふものであつた。

ロッキーに入つた始めの人間はインディアンで、しかも極めて少數の獵師に限られたが、百五十年前から、高價の毛皮を商ふ歐洲人が、彼等の足跡を辿つて、段々峠を東から西へと越えはじめた。吾々の入つたカナダのロッキーは、僅々二十餘年前に、人目に觸れ

Mt. Alberta
カナダの山の名

この山に特殊な
る光景は、山火
に荒れた黒い木
立の燒野が原
を、黄色な花が
蔽つてゐること
であつた。その
木立の奥に、名
も無い鋭い山岳
が、消ゆるを知
らぬ氷雪を厚く
戴いて峙つて
ゐることであつ

て、名を付けられたばかりである。従つて名も持たぬ山や、谷や、氷河が到るところに充ち満ちてゐて、まだ一通り備はつた地圖さへない。
この山では、氷河から流れ出た川が、人里に觸れることもなく、森を通り、野を走つて、氷の海に注いでゐる。こゝでは珍らしい極光が見られる。吾々は一夜マウントアルバータの裾でその極光を見た。

ロッキーには、美しいお花畑が少ない。この山に特殊なる光景は、山火に荒れた黒い木立の燒野が原を、黄色な花が蔽つてゐることであつた。その木立の奥に、名も無い鋭い山岳が、消ゆるを知らぬ氷雪を厚く戴いて峙つてゐることであつた。そしてその白雪の背景をなして、紺青の高空の高く蓋つてゐることであつた。
私は何時も思ふ、原始のまゝの荒涼たる自然を味はつた者には

た。そしてその白雪の背景をなして、紺青の大空の高く蓋つてゐることであつた。

日野山

京都府宇治郡醍醐の南に在り

鴨長明

和歌所寄人

法名蓮胤

山城國加茂社の氏人

建保四年歿

普賢

菩薩の名。釋迦佛の右脇士

往生要集

六卷、源信僧都

(一條天皇時代の著)

非常な苦痛が課せられるが、同時に非常な幸福が與へられると。此の二つは實地の探検そのものにも與へられるが、其の餘光が想像の思出にまで及ぶのは愉快なことである。

(『週刊朝日』の文に據る)

八日野山

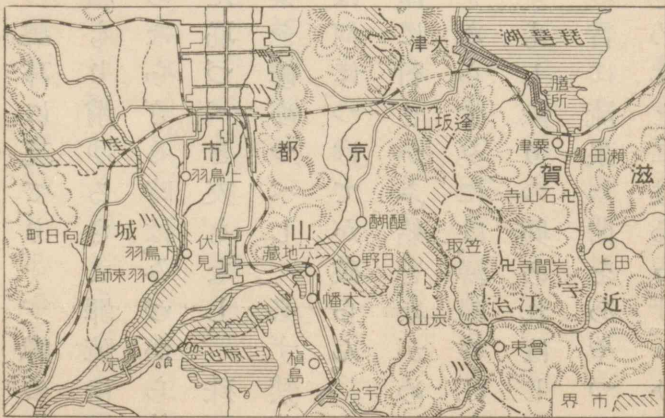
鴨長明

いま日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出だして竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、中には西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢竝に不動の像をかけたなり。北の障子の上に小さき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍らに箏、琵琶おのゝ一張をたつ。いはゆる折箏、繼琵琶これなり。東にそへて、葺のほどろを敷き、つ

阿彌陀佛に歸依すべきことを勸む。

かなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出だせり。枕の方にすびつあり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはちもろもろの藥草を植ゑたり。假の庵のありさま、かくの如し。

その處のさまをいはゞ、南に笕あり。岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。



日野山の位置

春は藤波を見
る。紫雲の如く
にして西のかた
に匂ふ。

跡の白波
世の中を何にた
とへむあさばら
け漕ぎゆく舟の
あとの白波（拾
遺集）
岡の屋
京都府、紀伊郡
湊陽江
淨陽江頭夜送客
楓葉荻花秋瑟々
（白樂天の琵琶
行）

紫雲の如くにして西のかたに匂ふ。夏は時鳥をきく。語らふごと
に死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に充てり。空蟬の世を
悲むかと聞こゆ。冬は雪を憐む。積もり消ゆるさま罪障に譬へ
つべし。もし念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづから休み
みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に
無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を
守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らん。もし
跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿
沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、湊陽の江をお
もひやりて、源都督の流れをならふ。もし餘りの興あれば、しばし
ば松の響きに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。
藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにはあらず。ひとり
調べひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

源都督
桂大納言源經信
琵琶の hands
秋風、流泉
琵琶の曲の名

手の奴、足の乗
物、よくわが心
にかなへり。

それ人の友たる者は、富めるを貴み、懇ろなるを先とす。必ずしも
情あると直なるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんには
しかず。人の奴たるものは、賞罰の甚だしきを顧み、恩の厚きを重
くす。さらに育みあはれぶといへども、安く靜かなるをば願はず。
たゞ我が身を奴とするには如かず。もしなすべきことあれば、則
ちおのが身をつかふ。たゆみならずしもあらねど、人を隨へ、人を顧
るよりはやすし。もしありくべきことあれば、みづから歩む。苦
しといへども、馬鞍牛車と心を悩ますには似ず。今一身を分かちて二つの用をなす。手の奴、足の乗物、よくわが
心にかなへり。心また身の苦しみを知れ、ば苦しむ時はやすめ
つ、まめなる時はつかふ。つかふとて、もたびく、過ごさず、ものう
しとて、心も動かすことなし。いかに況んや、常にありき常に動
くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らん。人を苦

人に交はらざれば、姿を恥づる悔いもなし。糧乏しければ、おろそかなれども猶ほ味をあまくす。

しめ人を悩ますはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。衣食のたぐひまた同じ。藤の衣、麻のふすま、得るに隨ひて肌をかたくし、野邊の茅花、峯の木の實、わづかに命をつなぐばかりなり。人に交はらざれば姿を恥づる悔いもなし。糧乏しければ、おろそかなれども猶ほ味をあまくす。すべてかやうのこと、楽しく富める人に對していふにはあらず、たゞわが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。
大かた世を遁れ身を捨てしより、恨みもなく恐れもなし。命は天運にまかせて、惜まず、厭はず、身をば浮雲になずらへて、たのまず、まだしとせず。一期の楽しみはうたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望みは折々の美景に残れり。
それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずは、牛馬七珍もよしくなく、宮殿樓閣も望みなし。今さびしき住居、一間の庵、みづから

これを愛す。おのづから都に出ては、乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰れかさとりん。(方丈記)

九 人間生活と自然

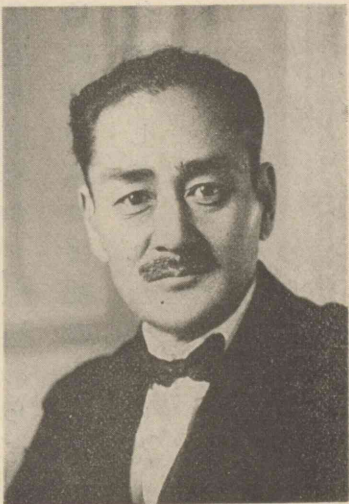
吉江 喬松

我々を取り巻いてある天然の現象は、我々が普通思つてある以上に、我々の日常生活と密接な關係を持つてあるものである。單に空が晴れてゐるとか、曇つてゐるとか、いふ事だけでも、それがどれだけ我々の氣分に、また我々の仕事の上に影響することであら

吉江喬松
佛文學者
詩人
早稻田大學教授
孤雁と號す
信濃の人
明治十三年生

う。更に人間の一生を通じて見ると、曇天の多い國に住む事と、日光の明るい土地に生活する事とが、それらの住民の異つた氣質を作り出だす上に、如何に與つて力あることであらう。

氣象臺の報告は、東京ぐらゐる氣候の變化の多い處が、歐洲諸國の



大都市にはないことを知らせる。實際、東京に於いては、一日の中また一夜の中に於いて、隨分溫度に變化が来る。今まで爽やかに晴れてゐた空が俄に曇つて、その中から氣味の悪い

風が吹き出して来る。人間が豫定した計畫が、天然現象の變化のために、餘儀なく中止せしめられ、また變更せしめられる場合が屢ある。かういふ變化が、東京人の性格の上に、またその徳性の上に

江戸兒の持つ氣短な氣質、宵越しの錢を持たないのを誇りにしてゐるやうな氣前、さつぱりしてゐて、執着を感じない、或る時は激しても、直ぐに水のやうに流してしまふ性向、それらは……。

日本人の持つてゐる、死を見ること歸するが如き氣質は、日本の天然自然を見ずには解釋する

影響せず居られるであらうか。江戸兒の持つ氣短な氣質、宵越しの錢を持たないのを誇りにしてゐるやうな氣前、さつぱりしてゐて執着を感じない、或る時は激しても、直ぐに水のやうに流してしまふ性向、それらは多數者の集合生活の中から、一つは必然的に生じて來た現象でもあらうが、また確かに、この地の自然現象が與へる不安と、頼みがひなさどが、彼等の素質を織り出して來たものに相違ない。

『近代の日本とその進化』を書いたフランス人リュドブイック、ナドオ氏は、日露戦争に際し、日本の研究に來て、内地にも戦地にも居た人であるが、この人が前記の著書の中で、次ぎのやうに言つてゐる。「死を見ること歸するが如き日本人の氣質は、日本の天然自然を見ずには解釋することの出來ないものである。日本に於いては、洪水、暴風、地震、海嘯、噴火などのために、年々幾千幾百の人命が失

ことの出来ないものである。

はれる。日本では、天然が思ふまゝに暴威を振つてゐる。日本に於いては、火災すらも天災の一種である。是等の天然現象は、日本人をして屢、不慮の死を目撃せしめ、生命の頼むに足らない事を感じしめる。日本人に取つて、生は果敢なくして頼むにたらず、従つて死ぬる時期を誤るのはむしろ恥である。それ故、何か事の起こつた場合、日本人は率先して命を投げ出さうとするのである。これも確かに一つの解釋に違ひない。戦争に際して死を急ぐとか、ある美的感激の下に死を選ぶとか、生よりも死を、現實よりも虚無を選ぶ宗教が、より強い勢力を持つとかいふ事實も、日本に於ける天然現象を窮めずしては解せられないことかも知れぬ。

この昔ながらに暴威を振つてゐる天然を制御するには、日本人が餘りに弱いのであらうか、それとも、日本の天然が制御せられるには餘りに荒いのであらうか。日本人は家屋を建てるのに、大切

日本人は、天然の懷ろに身を任せ、天然の力に命を委ねてゐる。

島國の日本に於いては、天然と人事とが混淆し復生してゐる。

な器具や物品を藏するためには土藏を造る。けれども、人間が住むためには風雨に害はれ、火水に破られ易い木造の家を建てる。それは大洋の中を一葉の小舟に乗つて漂つてゐる様なものである。それ程日本人は、天然の懷ろに身を任せ、天然の力に命を委ねてゐる。そして人間が構成した造營物、人間が工夫した庭園、人間が集合してゐる都市の上を、天然が踏み荒らして通り行くその足跡を「寂」と呼んで、一種の消極美を其處に認める。それほど島國の日本に於いては、天然と人事とが混淆し、復生してゐるのである。これを、淡青の空の下に、嘗て地震に脅かされたこともなく、大きな嵐の荒れたこともなく、豊穰な黒土を耕して、麥の穂波を漂はせ、葡萄の紫玉を連れしめてゐるフランスの農人等の生活と對照して見ると、兩國の性格の相異の原因の一半を、人間生活の直接環境たる天然現象の相異に歸せしむる事も、あながち無理な事とは

言はれないのである。

また或る歴史家はいふ。「或る團體と團體とが相争ふ場合などに、それが戦闘であらうが、談判であらうが、その日の天候が争闘者相互の上に多大なる影響を與へるものである。戦闘と天候との關係、これはいふまでもないことであるが、談判などの場合でも、或る病氣がちな、神經過敏な代表者が選ばれて、その任を果たす場合に、その日が爽やかな晴天である事と、陰氣な曇日である事とが、その團體の利不利にどれほど關係があるか判らない。」と。なるほど、ポーツマス談判の日は晴朗であつたか、陰鬱であつたかといふことは精細な觀察眼を持つた歴史心理學者の見逃し難い事象であるに違ひない。

人界の大事變が起こるに先だつて、天然現象に或る變動が現はれる。古代人は、それを其の事變の徵候の如く、前表の如く考へた。

Portsmouth
米國東北部の軍
港、日露戰爭
和會議地

San Francisco

併しそれは人間の心理過程に對する誤つた觀察である。自然と人事とは、その如く前兆と事件といふ風に關係してゐるものではなく、寧ろ天然現象の變化によつて不安動搖を引き起こされてゐる人心に、言ひ換へれば常とは異つた意識で生活してゐる人々の間に、事變が生じて來るのである。天變地異のあつた後、ことに大地震や、大洪水などのあつたすぐ後には、必ず人間同志の道德上の動亂が起こる。先年サンフランシスコに大地震があつた後、種々の罪惡が殆んど公然に行はれて、全市の風教が全く亂れてしまつたといふが、これはサンフランシスコに限つたことではない。自然力の爲めに人間の文明が全く玩弄物のやうに破壊せられると、今まで均整を保つてゐた人心が動亂して、常時は押へられてゐた本能が亂れ狂ふのである。

これは決して本能ばかりではない。常は押へられ、制せられて

Caesar
ローマの大政治家
(100-44BC)
大鹽平八郎
大阪の奥力で陽明學者であつたが、天保八年亂を謀り、事成らずして自殺した。年四十六

ゐた不平が、一時に爆發することもある。また當然起こるべき事象が、この自然の攪亂期に乗じて頭をあげて來ることもある。シイザアが刺客の手に斃れる前に、大暴風雨があつたとか、大鹽平八郎が兵を擧げた前日に、日光が不思議な色を放つたとかいふが、これは事變の前兆ではなく、寧ろ誘因であり、舞臺であり、背景であり、伴奏樂であらう。要するに、人間の歴史上の大事變を、自然の手が一緒に刻み出し、織り出して來るのである。子供が風の吹くのを好むと同じやうに、犬が雪の降るのを好むと同じやうに、天然の異變の中で、人々は隠れた意識を覺醒せしめて、飛躍するのである。

〔自然美論〕

10 海 三 題

元旦の挨拶

白鳥省吾

白鳥省吾
詩人
宮城縣の人
明治二十三年生

日の出よ。

朝の海よ。

ともに太古のまゝだ。

永久に若々しい鼓動を持つ海は、

いま日を送り出した喜びに顫へてゐる。

永久に若々しい光を放つ日は、

いま海から生れた喜びに微笑んでゐる。

それらの呼吸し合ふのは

何といふ香ばしさだ。

それらが陸への挨拶は

何といふ立派さだ。

堀口大學

詩人

東京の人

明治二十五年生

海の風景

堀口大學

空の石盤に

鷗が *Alce* を書く。

海は灰色の牧場です。

白波は綿羊の群であらう。

船が散歩する、

煙草を吸ひながら。

船が散歩する、

口笛を吹きながら。

福田正夫

詩人

神奈川県の人

明治二十六年生

月かゝりて空に

福田正夫

月かゝりて空にある時、

砂を踏みながら歸つてゆく漁夫の群。

渚には光碎け、光碎け、

波の音吼えて、

濁聲どろこゑに語る彼等と共にコーラスをつくる。

あゝかゝる一瞬、

かゝる一瞬ありて海に住む者は幸福だ。

一一 西郷と大久保

山本有三

山本有三

文學者、劇作家

本名は勇造

栃木縣の人

明治二十年生

大久保邸客間

床に

相看兩不厭

只有敬亭山

と大書した幅が掛かつてゐる。

伊藤(博文)が椅子にかけて待つてゐる。稍待ちくたびれた形で幅なぞを見てゐる。

家令が這入つて来る。

家令大變お待ちを願ひまして、もう間もなくお歸りになると存

じますが……

伊藤いや。——先程から感服してゐるんですが、見事な書ですね。

(幅の近くに寄り)

雪蓬といふのはどういふ人です。

家令何でも西郷さんが沖の永良部島へ島流しにおなりになつた

時、この方もそこにおいでになつたので、お知合になつたのだ

とか伺つて居ります。たしか西郷さんはこのお方から、いく

らか書をお習ひになつたのぢや御座いませんかな。

伊藤ふム。それにこの句がいゝ。「相看^{ふたつちが}て兩ら厭はず。只敬亭山

有り。實にいゝ句だ。

家令雪蓬といふ方は、この李白の詩が大層お好きで、筆をお執りに

なると、この句ばかりお書きになるんださうです。——あ、お歸

りになりました。

大久保が這入つて来る。

大久保どうも不在にして御無禮しました。何か急用ですか。

伊藤少々御意嚮を伺ひたいことが御座いまして。

大久保さうですか。勝さんと話が長くなつたものだから……

伊藤あ、あの件ですか。如何でした。お引受になりましたか。

大久保それは引受けて貰つたさ。征韓派の面々が去つた後、すぐに後継内閣が組織出来ないやうであつては、天下に面皮がないではありませんか。なかに、五参議が揃つて辭職しようとも、何の事もありはしません。

伊藤實はその辭任問題について上りましたのですが、西郷さんの辭表はどう裁きましたものでせう。

大久保それは昨日岩倉公に御返事を差上げてあります。

伊藤辭任を聽き届けよといふのでございませう。併し外の方と違つて、西郷さんでございますからな。岩倉公も一方ならぬ御心配で、是非ともお差留めに相成りたいと仰せになつて居りますのですが……

大久保いや、引留める要はありません。止めたいといふものは止めさせる方が却つてよろしい。その方が當人の爲めです。

伊藤けれども、それは如何にも忍びないことですから……

大久保いや、無駄な手数は省くことです。第一、引留めようとしたとて留るやうな西郷ではありません。現に黒田が行つてさへ徒勞だつたではありませんか。

伊藤それはさうですが……

この際至極の御處置かと思ひます。

大久保陸軍大將だけは従前の通りといふことにして、参議並びに近衛都督はお役御免になされるのが、この際至極の御處置と思ひます。

伊藤(なほ躊躇しながら) それでよろしうございますかな。大久保(きつぱり) よろしいですとも。

伊藤西郷さんの辭表が出た時、僕はあなたこそ第一にお引留めになる御方と思つて居りました。御意見の相違は相違。これはこれで、また別ですからな。

大久保 いや、この際は引留めないのが本當です。彼れを引留めない者こそ、彼れを最もよく知つてゐるものといふべきでせう。氣まゝにさしておやりなさい。その方が却つて西郷もうるさくないでせう。

伊藤 さうですか。

大久保 わたしはいつかはかういふ日の來ることを臆げながら豫期してゐました。今回の事がなくとも、これは早晚免るゝことの出來ないものです。それが今來たまでです。この事は戊辰の役に於いて、鐵砲の音がはたと止んだ瞬間に、わたしは豫感したことです。わたしと西郷とは兩立し難い人間です。例へば冬と夏とのやうなものです。二人は當然離るべき運星なのです。

戊辰の役に於いて、鐵砲の音はたと止んだ瞬間に、豫感した事です。

伊藤 併しお二人は今日まで、殆んど一體のやうになつてお働きに

なつたのではありませんか。

大久保 御一新前まではさうでした。世の中が不順であつたからです。夏のさ中に、雪が降るやうな時勢であつたから、それが目立たなかつたのです。けれども物事が緒について、時候が追ひく、定まつてくれば、夏は夏、冬は冬、それ／＼其の位置に返るのが順當でせう。そして夏は夏らしく、冬は冬らしくあつてこそ然るべきものだ、わたしは思つてゐます。

伊藤 西郷さんも、さう思つておいででせうか。

大久保 さ、西郷はどう思つてゐますか。

問。

大久保 伊藤君、西郷が今度、どうして、あんなに向きになつたのか、知つてゐますか。

伊藤 向きになつたといひますと、？

夏のさ中に雪が降るやうな時勢であつた。

汝のいゝやうに。

大久保あの男はいつも黙々として居つて、滅多に自分の意見を吐かない男です。わたしが見込を述べると、汝のいゝやうに。さう云つて、決して逆らつたことがありません。功は人に譲り、自分はいしるひに引下がつてゐるといふ性質の人間です。それが今度の御評議に限つて、どうしてあんなに突張つたのか。君はそこに氣がつかまへませんでしたか。

伊藤自身の御持論を飽くまでも御主張になつたものと私は思つて居りましたが、……

大久保それは無論さうです。併し伊藤君、西郷は實は死にたかつたのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです。

伊藤（無言。大久保の顔を覗くやうに見る。）

大久保あの男は死を急いで居るのです。いつか私にこんな事を言つたことがあります。「己はもう、一度死んだのだから、天地に

月照

京都清水寺成就院の住職

尊王攘夷家

安政五年十一月

幕吏の追撃に窮して隆盛と共に海に投ず。

年四十六

順聖公

島津齊彬

安政五年歿

年五十

三郎公

齊彬の弟

島津久光

明治二十年歿

家はないのだ。知つてゐるでせう。彼れは月照和尚と海に投じて、自分だけ助かつた、あの事をいふのです。

伊藤存じてゐます。

大久保それからまた、自分を取立て、下すつた順聖公様がおかくなつた時、西郷は追腹を切らうとして果たさなかつたこともあるのです。それやこれやで、自分は主におくれ、同志におくれてゐるといふ慚愧の念が、絶えず頭にあるのです。その上現在の三郎公にはひどく疎まれて居りますし……

伊藤なるほど……

大久保ですから、どうせ捨てる生命なら、朝鮮に行つて捨てたい。そして自分の屍を橋渡にして、若い軍人どもを働かしてやりたい。手柄を立てさせてやりたい。かう西郷は思つてゐるのです。わたしは彼れのさうした心の中を思ふと、實際死なし

てやりたく思ひます。死なしてやる事が、むしろ西郷を生かしてやることのやうにも思ひました。併しわたしまでがそんな心に引き入れられるやうであつてはなりません。どんな事をして、西郷には生きてゐて貰はなくつてはなりません。國家の大局からは申すまでもなく、西郷一身のためから申しても、斷じて彼れを死なせることは出来ません。西郷は恐らくわたしを怨んでゐるでせう。併しどんなに、どんなに怨まれても、わたしは彼れを殺すわけにはいきません。——ところが伊藤君、わたしは嘗て西郷に死を迫つたことがあるのですよ。

伊藤あなたがですか。それはいつものあなたにも似合はない振舞ですな。

大久保わたしも若かつた。それはもう十何年も前の話です。丁度

西郷が大島から召還されて、三郎公のお伴をして京へ上る時のことでした。殿にはもと／＼御覺えがよくないところへ、憂國の心からとは申せ、お言付を待たないで、西郷が少し取計つた事をしたために、彼れは忽ち召捕られるやうな羽目に立至つたのです。わたしはその時つく／＼世の中が厭になりました。一心同體の西郷がこんな事になつては、もう討幕の望みも何もない。こんな位ならいつそのこと、二人刺し違へて死んでしまつた方が増しだ。さう決心して、彼れを濱邊に誘ひ出したことがあるのです。……

伊藤それが今度は、思はない事で刺し違へてしまつたわけですね。大久保人生の事思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。わたしは西郷と死なうとして死ねなかつた。西郷がいつかわたしに云つたことがあります。「人間は死な

人生の事思議す
べからずです。

うとしても中々死ねるものでなく、生きようとしても案外生
きられないものだ。それを聞いた時にはそれ程にも思ひま
せてしたが、わたしは今その言葉をしみく、思ひ出します。

書生が這入つて来る。

書生あの西郷さんがお歸りになつてしまつたさうです。
大久保國へか。

書生はい。たゞ今役所から知らせて参りました。
大久保さうか。——とうく歸つてしまつたか。

伊藤すると西郷さんへの辭令は、どうしてもあなたが仰しやつた
通りにする外はありませんな。

大久保(うなづく)

伊藤では、私は早速歸つて、岩倉公に復命いたしませう。

伊藤去る。

大久保書生を呼ぶ。

大久保おい、その掛物を掛け變へてくれ。

書生何を掛けませう。

大久保何でもいゝ。南洲のものを掛けてくれ。

書生幅を掛けかへる。それは

「盡人事、俟天命」南洲書

と書いた一軸である。

書生これでよろしうございますか。

大久保うム。

書生去る。

大久保しづかに立つて床の間に香を焚く。

夕暮と共に部屋の中が次第に暗くなる。併し外はまだ明るい。西
日を受けた障子に庭の松影が黒々とうつつてゐる。
大久保じつと黙したまゝである。

幕

『西郷と大久保』

一二 世界大戦争 その一

過去一切の合計が十九世紀を産出せしが如く、十九世紀史は茲にまた二十世紀史を産出しつゝあり。一九〇〇年前後數年の間に世界不穩の徵候發露して、一八九八年、玖馬に米西戰役起こり、翌九九年に、支那義和團の暴舉と南阿獨立運動と起こりたり。萬里を隔て、殆んど同時に平和を攪亂する大事件の突發せしは、多年鬱積せし勢ひの漏れたるものにして、二十世紀に捲き起こりし世界大動亂の先驅たりしこと、後に至りて思ひ合はされたり。當時世界の舞臺に目覺ましく活躍せし者を、米のルーズヴェルト、英のチエムバレン、獨のウイルヘルム二世の三傑とす。然れども、この

Theodore Roosevelt
velt
アメリカ合衆國
第二十六代の
大統領
(1858-1919)

Austen
Chamberlain
英國軍事内閣の
無任所大臣
Friedrich Wilhelm
helm (1859-)
ドイツ先帝
今和蘭に在り

何の日にか世界
列國の均勢に變
動を與へずんば
已まざらんとす
るものありき。

獨佛露三國の結
託。

日英同盟の成立

三人は、固より代表者にして、彼等の背後には、それら強大なる所屬國家の力あり、いづれの日にか、世界列國の均勢に變動を與へずんば已まざらんとするものありき。此の間に於ける列國の向背は、支那に於いて最も明白に現はれたり。聯合國は均しく義和團を追窮しながら、日英米の三國一方に親しめば、獨露佛の三國また他方に相近づくの狀勢を示せり。

獨が東亞に根據を得んとするや、久しく東方に野心を抱きし露に交渉したり。而して露は同盟國の故を以て佛をも誘ひしかば、こゝに三國結託の形は成りぬ。されど、こは東洋に局限せられたる事にして、歐洲に於いては、依然獨佛は相敵視し、露獨も亦對抗の狀をなしたり。英は印度、彼斯の危殆を顧念して、日本と同盟するの有利得策なるを認め、日本もまた露の壓迫に苦しみて、英と協和せんことを望みて、こゝに一九〇二年、日英同盟の成立を見るに至

疲弊困憊

日露兩國は米國の斡旋に因りて媾和す。

れり。日英同盟は成立したれども、日露の衝突を豫防するには足らざりき。露の日本を解せずして之れを侮りしは、實に一九〇四年より五年に互りし日露戦役を惹起せし重大なる原因なり。兵驕るものは敗る。果然、露は海に陸に殆んど連戦連敗して勝算なかりしかば、遂に此の戦役を續くるは徒らに國力を減耗する所以にして、一日も早く媾和するを自國の爲めに有利なりと考ふるに至れり。露の疲弊困憊するや、これを喜びしは獨及び英にして、互に利害を異にしつゝ、同じく露の窮乏を待ちたり。殊に獨は露に兵器の供給其の他の援助をなしつゝ、日露兩國が戦役の爲めに共倒れせんことを希望したり。幸に日露兩國は、米國の斡旋に因りて媾和し、幾許か禍を少なくすることを得たりしが、獨はこれより露廷内に力を伸ばし、その疲弊の甚だしきを探知して、露佛同盟ありとも、佛を撃破するの決して難からざること信ずるに至れり、

ウイヘルム二世は、從來事に當たりて躊躇逡巡するを常とせしが、こゝに至りて、意滿ち氣驕りて、大陸の覇權を握り、英の海上權を殺ぐの計を立つるに至りぬ。

斯くて、露の敗戦以來獨逸の意氣頓に揚り、動もすれば傍若無人の態度に出づるものありき。ウイヘルム二世は、從來事に當たりて躊躇逡巡するを常とせしが、こゝに至りて、意滿ち氣驕りて、大陸の覇權を握り、英の海上權を殺ぐの計を立つるに至りぬ。かくて獨英開戦の避くべからざる事は、屢、人の論議する所となりて、年を逐うて其の形勢の露はるゝを見たり。

造艦術の變更せる結果、英國海軍は、從來立てたる二國聯合の標準を保つ能はず、獨逸海軍に六割を超過することすら困難にして、寧ろ獨と妥協せんことを望みしが、獨は忍耐して軍備擴張の苦に堪へて、英を凌ぐ期の至るを待たんとしたり。又獨は、その陸軍の競争國とせし佛が、政界紛擾の爲めに國防を全くするを得ず、白耳義國境に要塞を築くの案も、議會に否決せられて成らざりしかば、これまた恐るゝに足らずとなし、事起こらん日、一旦白耳義方面よ

Edward VII

英のエドワード七世は、多くの國を味方に誘はんとし、病に託して各國を旅行し、以て談笑の間に交情を温むるに努めたり。

り侵入せんか、疾風の勢を以て佛を征服すべく、それより轉じて露を征服せんか、英は戦はずして屈すべしとなしたり。かくて、ウイヘルム二世は、自國の力と、墺伊の同盟とを恃みて、以て世界の覇を争ひ得べしとせしが、これに反して英のエドワード七世は、多くの國を身方に誘はんとし、病に託して各國に旅行し、以て談笑の間に交情を温むるに努めたり。二帝の心は所屬國民の心にして、獨は自國の兵力に最も重きを置き、英は他國との聯合の力に最も重きを置きたり。

英は海軍を以て自國を安全にし得べしとは信ぜしかども、大陸に於いて獨と争ふには、結局他國の兵に頼らざるべからずとしたり。かくて佛との提携は、その最も必要とする所なりき。佛も亦露が豫期せしほどに強からざるを知りて、英と接近することに努めしかば、英佛は自ら親近し來たれり。その上、英と露とは、獨に對

抗する爲めに互に相結ぶを得策とせしかば、こゝに英佛露三國の協同を固うすることとはなりたるなり。

一三 世界大戦争 その二

斯くて、歐洲の天地に於いて、勢の時々刻々に切迫し來りし折柄、一九一四年六月二十八日、墺國皇儲夫妻が一塞爾維人の爲めに弑されたる椿事は、突如として世界の人の耳朶を打ちぬ。七月二十三日、墺は條件を定めて塞に要求する所ありしが、塞は二十五日を以てこれを拒絶せしかば、墺は二十八日を以て愈、塞に宣戦し、三十日露は動員を始め、八月一日獨は露佛に宣戦して、こゝに世界大戦の序幕は切つて落さるゝこととなりたり。四日英は最後通牒を以て、獨に白耳義中立の約を守るべき事を要求せしが、獨はこれ

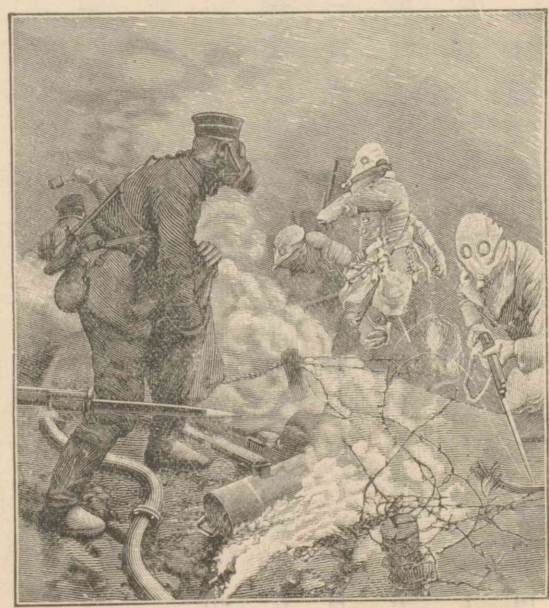
墺國皇儲夫妻が一塞爾維人の爲めに弑されたる椿事は、突如として世界の人の耳朶を打ちぬ。

世界大戦の序幕は切つて落されたり。

Liege
白耳義の要塞
獨は白耳義を席
卷しつゝ、潮の
如く佛に侵入し
たり。

二十四ヶ國
米、英、佛、伊、
日、白、希、ア
ラジル、支那、
キニエバ、グワ
チマラ、ハイチ、

を聴かずして、直ちに兵を白耳義に進めしかば、英は遂に起つて獨に宣戦したり。八月二十日リエージ陥落して、獨は白耳義を席卷しつゝ、潮の如く佛に侵入したり。我が國も日英同盟の誼によりて、起つて獨に宣戦し、青島の攻略に着手し、伊も亦起つて聯合側に加はり、後れて一九一七年に至つては、米も亦遂に獨塊に宣戦するに至りしかば、聯合側に加はりしもの、實に二十四國の多きを數ふるに至りぬ。これに對して獨塊の同盟側に與せしは、唯だ勃加利、土耳其の二國のみなりき。



毒瓦斯戰

Lorraine
普佛戰爭の時、
アルサス州と共に
佛國から獨逸に
割讓された州

佛は往年の讐を報ゆべき時機到來せりとなし、軍をローレンに進めたりしかども、白耳義を通過して雪崩の如く北方に侵入する獨軍を防ぐに由なく、整はざる軍備を以て國境に邀へ戦ふの不利を見、英斷を行ひて、全速力の後退を決行せしかば、獨軍は機逸すべからずとなし、追撃を以て佛軍を撃破し去らんとしたり。獨軍にして若し豫定の如く、早く白耳義を通過し得たりせば、一層猛烈なる勢を以て佛軍を追撃し、遂に佛を危くしたりしやも未だ知るべからず。リエージの維持は、僅かに十日間に過ぎざりしかども、獨軍の豫定を狂はせ、佛をして軍備を整ふる時を得しめたる功頗る多かりき。リエージにして更に長く抵抗し得たりせば、佛は大軍を白耳義に入れて、こゝに最後の勝敗を一戦に決し得たりしやも未だ知るべからず。リエージの陥落は、獨の爲めには晩きに過ぎ、佛の爲めには早きに過ぎたりといふべし。

Yarne, R.
巴里の東北を流れて、セイヌ河に合す。

Joffre, Marshal
Joseph-Jaques.
元帥、大戦の初期の佛白軍總指揮官

獨軍進んでマルヌ河近く迫りし時、佛將ジョッフは茲に兵を回轉し、敵を邀撃してこれを阻止し得たるのみならず、これを敗走せしむるに至れり。これ恐らくは敵軍の取れる追撃法、宜しきを得ざるに由りしならん。然れども、さすがは多年準備に銳意し、必勝を期して開戦したる獨軍なり、マルヌに大敗したりといへども、潰亂の醜狀を暴露することなく、北佛の重要なる土地を占領し、塹壕に據りて長く對抗の勢を成すを得たり。佛も亦獨軍の進撃をこそ遮るを得たれ、國外にこれを驅逐するを得ざりしのみならず、廣大なる工業地を占領せられて、一方ならぬ苦痛を嘗めたりき。轉じて東方を見れば、形勢全く之れに反して露頻りに塙に勝ち、普を脅すの勢を成したり。斯くて佛露東西に呼應せば、聯合軍の勝算必ずしも無きにあらずるが如くなりしが、獨は露佛の無線電信を攪亂してこれを妨げたり。また佛軍を西方に抑制して、その

Warsaw
ポーランドの首府、大戦當時は露領

寸進尺退して、復振ふこと能はざりき。

Verdin
"ノーズ河の分岐點に在り
一級要塞地

Pétain, Henry-Philippe.

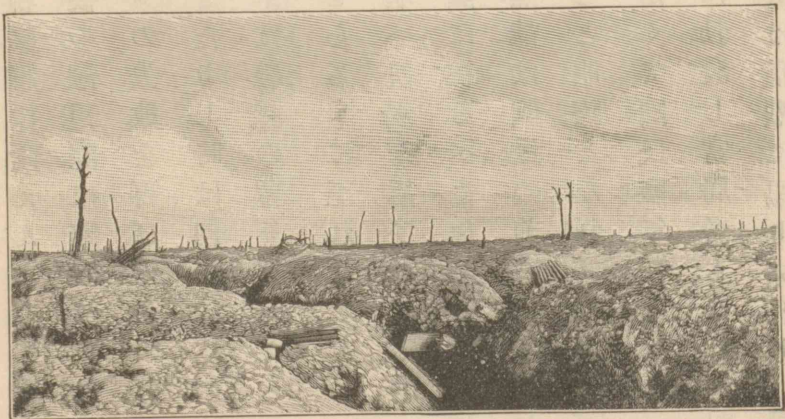
容易に進出し得ざるを見るや、窺かに西方の兵を抜いて、之れを東方に送り、輕舉侵入し來りし露軍に一大打撃を與へぬ。かくて一九一五年八月ワルソー陥落して後、露軍は屢、戰勢の回復を試みたれども、寸進尺退して、復振ふこと能はざりき。獨は既に露を東方に破りしかば、更に力を西部に注ぎて、一九一六年二月下旬を以てヴェルダン攻撃を開始し、之れを突破して巴里に迫らんことを計れり。獨が大兵力を以てヴェルダンを攻むるや、殆んど何者の力を以てしても、これを防ぐに由なきを思はしめ、世界は此の主要塞の陥落を以て、唯だ時の問題なりとするに至れり。然れども、佛軍は能く防ぎて屈せず、遂に獨をして大損害を忍びて攻撃中止を決行するの餘儀なきに至らしめぬ。是に於いてか、世界は、守將ペタンを稱揚し、よく獨の陸軍に當るべきものは、露のそれにあらずして佛のそれなることを知りぬ。

鞏固を致す。

開戦以來急造せられたる英の陸軍は、月々に増加して、北佛の戦場に輸送せられ、佛英の協同作戦は愈々鞏固を致し、かども、未だ獨軍を壓迫して、占領せられたる佛領土の回復をなすこと能はざりき。獨軍はヴェルダンに阻止せられたれども、未だその陣地を固守するを難しとせざりき。されば、獨にして既得の有利なる戦勢の維持に努めて、多くの兵力を損せざらんことを期したりせば、彼れは有利なる媾和の機を見出だしたりしやも未だ知るべからず。然れども、獨の策これに出でず、飽くまでも進んで勝たんと謀りしかば、無制限潜航艇戦は、遂に米國を驅りて敵に赴かしめ、再度の巴里攻陥の舉は、徒らに精銳なる大兵を失ふに過ぎずして止みぬ。これ獨人の意氣の盛んなるを示すものなりしかども、また實に恢復すべからざる獨の失策にして、戦敗の近因は蓋しこゝに在りて存するなり。

米國を驅りて敵に赴かしむ。

一九一八年三月二十一日を以て、獨が巨大なる軍を以てマルヌ方面に企てたる大攻撃は、相當なる効果を收めて、聯合國を威嚇するに足るものありき。其の一度進撃を始むるや、向ふ所破碎奪取せざるなき勢を以て、巴里を距る二十里の内に迫り、無比の巨砲を以て之れを砲撃して、世界の人心を寒からしめたり。六月末の獨の報告に依れば、近き三箇月に得たる無傷の捕虜十九萬千四百五十四人、大砲二千四百七十六門なりきといふ。以てその成果の大なりしを知るべし。この攻



戰の跡(佛國ソンム地方)

撃は七月十八日まで繼續し、英佛軍の聯撃將に斷えんとして、聯合諸國をして手に汗を握らしめしが、最後の瀬戸際に臨みて、哀れや獨軍力盡きて攻むる能はず、ヴェルダンの失敗を再びするの已むなきに至りぬ。蓋し獨の攻撃力の竭きたりし時は、同時にその防禦力の薄弱を致し、時にして、爾來獨軍は戰勝の望み絶えたるのみならず、更に敗軍の憂への痛切に感ぜらるゝに至れるなり。

これまで數年の間、獨國民の萬難に堪へ飢渴を忍びしは、獨帝の威力に信賴し、最後の大勝利の必ず自國に在るべきを期待したりしに由る。今やウイヘルム二世の無能は國民の前に暴露せられ、従つて最後戰勝の空望に過ぎざること明瞭となれり。獨逸國民たるもの動搖せずしてやまんや。かくて國民多年の忍耐は、ここに不平怨嗟の聲となりて、國民の間に勃發し、當局者もこれに對して施すべきの策なく、遂に革命の烽火は猛烈に揚り來れり。同

時にさしもに威信ありし獨帝は、倉皇として和蘭に遁れ、世界の脅威として雄を誇りし獨逸帝國は、一朝にして無帝國と化し去りたり。思ふに、今次の世界大戰爭は、實は英獨爭覇の戰爭にして、英は巧みに世界國際間の形勢を有利に作成し、正義人道、扶弱挫強の美名の下に、聯合國の力を以て獨を斃すに至りしなり。而して獨の敗れしは、全く餘りに自國の力を過信して、敵を知るの足らざりに由れるなり。

〔日本及日本人に據る〕

一四 媾和會議の結果と帝國の前途

西園寺公望(演説)

閣下、諸君、

今日は吾々媾和會議から歸りました者の爲めに、盛大なる歡迎の宴を御催し下され、又只今は澁澤男爵の懇篤なる御挨拶に接し、

西園寺公望
明治維新の元勳
大正、昭和の老
臣、公爵
京都の人
嘉永二年生
澁澤男爵
後の子爵
名は榮一
昭和六年歿
年九十二

誠に感謝に堪へません。私は歸朝早々、媾和會議の經過或は之れに關する感想に就いて、種々の方面より質問を受けましたが、當時はまだ復命前でありました爲め、之れに答へることが出来ないのを遺憾に思つて居りました。そもく政治は輿論を基礎とすべ



西園寺公望

し、外交は國民の後援に依らざるべからずといふ、これが私の持論でありました、會議に關する私の所感を、同胞に對つて披瀝することは、私一切に希望する所でありましたが、今日此の好機會に於いて一言することを容されたのは、誠に欣幸とする所であります。

六月二十八日

大正八年（西紀一九一九年）

Versailles

パリの宮殿

第一段は、聯合與國間の協議で、聯合國より獨逸に示すべき媾和條件を決定することを目的としたもの、第二段は、右の條件を基礎とした對獨交渉であります。

利害の牴觸。

獨逸との平和條約は、御承知の如く、去る六月廿八日ヴェルサイユに於いて調印されましたが、それ迄の媾和會議の經過は、大體二段に分かれて居りました。その第一段は、聯合與國間の協議で、聯合國より獨逸に示すべき媾和條件を決定することを目的としたもの、而して第二段は、右の條件を基礎とした對獨逸の交渉であります。聯合與國は、初めより獨逸に對しては、媾和條件に就いて、一切口頭の談判を禁じ、單に書面を以て質問を提起し、又は意見を開陳することを許すに止めた爲め、第二段の獨逸に對する交渉は、寧ろ簡單でありました。之れに反して、第一段なる聯合與國間の協議は、與國の數も廿七箇國の多きに達し、其の間に利害の牴觸があるのみならず、主として一切の問題を決定すべき責任のある、所謂大國の間に於いても、それく立場を異にし、意見を異にした爲め、問題を取り纏めるに困難であつたことは、實に想像の外でありま

した。さて此の媾和會議の結果に就いては、各國いづれにも非難もあり、不平もあります。固より人間のした仕事で、缺點の多いのも止むを得ぬことでありますが、與國間に於ける此の複雑なる機微に觸れた折衝の真相が、他日世間に明らかになることもあらば、今日の非難の多くが、自ら消滅すべきことは、私の信じて疑はざる所であります。

今回調印された對獨平和條約は十五編百七十五條より成る大冊であつて、其の中には、純然たる媾和に關する條項の外、永久平和の基礎たるべき條項をも含んで居ります。

媾和に關する條項は、獨逸の兵備を極端に制限して、危険なる侵略的軍國主義を打破すること、アルサス、ローレンを佛國に復歸せしむること、波蘭を再興すること、獨逸の海外領土を悉く放棄せしめて、其の世界政策を覆すこと、獨逸の國力の有らん限りを盡くし

今回調印された對獨平和條約は十五編百七十五條より成る大冊であつて、其の中には、純然たる媾和に關する條項の外、永久平和の基礎たるべき條項をも含んで居ります。

條約履行の擔保

て、戰爭に基づく損害を賠償せしむること、平和條約履行の擔保として、ライン河左岸の地域を占領すること等を主眼として居ります。此くの如き條件は、獨逸が行つた暴行の甚だしかつたのに對して、已むを得ぬものだといふのが、一般の説でありました。又永久平和の基礎たるべき條項の中で、最も顯著なるものは、國際聯盟規約、及び勞働協約の二つであります。國際聯盟規約は、今度の平和條約の骨子であつて、各國協同の力に依つて、戰爭を豫防し、國際の案件を平和的に處理しようとするものであります。其の能く所期の目的を達成すると否とは、主として實際の運用如何に依ることとは、勿論であります。我が國が大國の一たる資格を以て、聯盟理事會の重要な一員となり、此の國際的大組織の善用に貢獻し得たのは、最も愉快なる事であります。吾々はこの任務を十分に諒得して、かゝる恒久平和樹立の端を發せんとする時に當たり、將

來再び人類の間に戦争の慘禍を見ることのないやうに、最善の力を致さんことを期せねばなりません。

次に労働協約は、各國に於ける労働者の地位、及び生活状態を改善し、其の身神の幸福を増進することを以て目的とするものがあります。労働問題の解決宜しきを得ると否とは、一面に於いては、社會思想の趨向に至大の關係があり、又他の一面に於いては、國民全體の經濟上の能率に尠からざる影響があります。是れが歐米爲政家の等しく該問題に腐心する所以であります。我が國に於いても、速かに適當の方策を定めて世界の趨勢と背馳せぬことを期すると共に、之れに關して執るべき一切の措置は、専ら公平を主とし、且つ堅實なる基礎を有せしめねばならぬと存じます。

以上の一般問題の外に、帝國に特殊なる問題が三件ありましたことは、諸君の御承知の通りであります。先づ、赤道以北に於ける

山東問題については、隱忍自重、折衝久しきを経て、平和條約の中に、之れに關する規定を見ることとなりました。

人種的差別待遇撤廢の件に關しては、終に目的を達せずして、本件の解決を他日に譲るの已むなきに至りました。

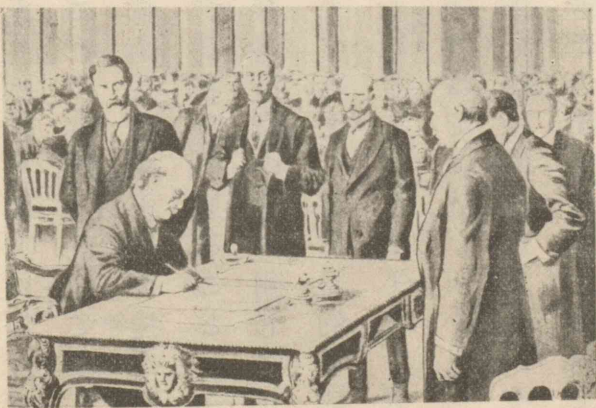
我が國は媾和會議に於いて、よく列強と協調を保持することを

獨領南洋諸島は、國際聯盟の委任に由り、帝國領土の一部として、帝國が之れを統治することとなりました。次ぎは山東に於ける獨逸の利權を帝國に讓與せしむる件で、これが解決に就いては、甚大なる困難を惹起しましたが、隱忍自重、折衝久しきを経て、遂に與國の贊同を得、平和條約の中に、之れに關する規定を見ることとなつたのであります。最後に、人種的差別待遇撤廢の件に關しては、我が委員は實に奮闘努力の限りを盡くしましたが、終に目的を達せずして、本件の解決を他日に譲るの已むなきに至りました。これは、私等一同の深く遺憾とする所であります。

今回の世界大戰の終局に際し、我が國が國際間に於いて、孤立の地位に立つが如きことがないかとは、一部人士の憂慮した所でありましたが、我が國は媾和會議に於いて、よく列強と協調を保持することを得たのみならず、同會議を機として、國際政局に於ける帝

得た。

國の地位を著しく昂上せしめたのであります。即ち我が國は、今回の媾和會議に於いて、世界五大國の班に列して、歐洲の問題に關與するの端を開き、又國際聯盟成立の曉には、其の内部に在つて、重要な地位を占め、恰く東西各般の案件に參畫すべき權利を獲得したのであります。是れは實に帝國幾千歳の歴史に一新時期を劃するものであつて、其の此くの如くなるに至つたのは、専ら開國以來連續せる我が國民一般の努力の結果に因るものであることは、言ふ迄もありません。此の事は過日も、ある機會に於いて一言しましたが、今日重ねて此の事に言ひ及ぼす所以



(ゲーヨゲドロ表代國英) 名署の約條和媾

寒心警戒すべきは、武斷主義の國、侵略好戰の國民と視らるゝ事。

のものは、此くの如く帝國の地位の昂上せると共に、帝國の中外に對する責任の、著しく重きを加へた事を、我が國民に訴へて、深くその注意を喚起せんが爲めであります。今や、此の世界は殆んど改造せられんとする時運に際して居ります。此の時に當たつて、我が國は眞正なる正義公道を基礎とする永久平和の確立に貢獻する事を根本義とし、内に在つては、實力の涵養を怠らざると共に、絶えず文化の向上に努め、外に對しては、國際の變局に處して、克く機宜を制することを忘れず、常に公平不偏の態度を持して列國の我れに對する信頼を厚うし、以て今日占め得たる地位を維持するのみならず、更に其の向上を計ることを努めねばなりません。

これに就いて、尙ほ一言附加したい事があります。それは歐米人の中に、やゝもすれば日本を獨逸に比し、我が國を武斷主義旺盛の國、我が國民を侵略好戰の民と目して居るもののあることであ

帝國の前途のため、眞に寒心に堪へない。

ります。此の事は滯歐中、幾度か私の耳目に觸れて、其の都度不快の感を起こしましたが、此の誤解は、意外に根柢が深いので、現に日本の友人として知られた某政治家からも、此の事に就いて懇切なる注意を受けた事がありました。今や獨逸の危険なる軍國主義を打破し、永久平和の基礎が將に成らんとして、世界を擧げて歡呼して居る秋に當たり、獨り我が國が此の種の疑懼、誤解の目的物となつて居るといふ事は、當面の我が國家及び國民の活動に、莫大の不利益を及ぼす事は申す迄もなく、帝國の前途のために、眞に寒心に堪へない事であります。又列國の側から見ても、此くの如き謬見を懷く結果、我が國に對する態度、極東に對する政策を決定し、延いては世界の問題を處理する上に於いて、意外の錯誤を生ずるが如き事はないか、之れを思ふと誠に憂慮に堪へません。抑、此くの如き誤解を生ずるに至つたのは、多く爲めにする者の惡意の宣傳

に因るのは勿論でありまして、此の恐るべき宣傳に基づく誤解を匡正することは、實に我が國目下の急務であります。吾々は朝野を問はず、對内、對外の行動に就いて特別の注意を拂ひ、日本國及び日本國民が決して武斷的、侵略的のものに非ざること、事實の上に證明し、列國をして我が眞意を疑ひ、我が行動に反對するの餘地なからしむるやうに努力せねばなりません。

願れば、半世紀前に、我が國が門戸を開いて外國との交通を開始した際に於いては、國力が極めて微弱であつたので、外に對して國家の獨立を確保する爲め、先づ努めなければならなかつたのは、國防の事でありました。これが爲めに、開國以來、軍備の爲めには尠からざる努力を致したのであります。而して我が國家の存立を擁護する爲め、已むを得ず戦つた日清、日露の兩役を経て、武威を世界に輝かすに至りましたが、其の結果、皮相の觀察をなす者が、往々

誤解の原因

日本國民をば軍事のみに長じた好戦の國民と誤解するやうになりました。然し乍ら、我が文明の美質、精華が決して軍事上に限られぬ事は、我が過去の歴史が證明するばかりでなく、歐米に於いても、識者の夙に諒解して居る所であります。今や一面に於いて、我が國家存立の基礎が鞏固となりましたが、同時に他の一面に於いては、世界に永久平和の組織が成らんとして居ります。我が國が武備を怠らざると同時に、學術、文藝及び農工商の方面に奮勵努力すべきは、明らかに大勢の指示する所、従つて今日我が國民を好戰的國民と誤解して居る者も、遠からず平和的發展を遂げた成功者として我が國民を認識し、又平和的事業の貢獻者として我が國を謳歌するに至ることとありませう。又此の如くにして、始めて我が國が眞に其の世界的地位を堅實、有力ならしむることを得るのであらうと思ひます。もし我が國民が、此の時運の變遷を十分

眼前の小事に齷齪として、我が國を孤立せしむる勿れ。

に了解せず、徒らに眼前の小事に齷齪として、大勢の趨く所を察せぬやうな事があるならば、それは實に我が國を孤立せしめ、世界を敵とせしむるものであります。維新以來、幾度かの危機を経て、常に大局を謬らなかつた我が國民が、今更斯様な重大なる錯誤に陥る事は、あり得べからざる事とは存じますが、萬一にも斯様な事があつては、九仞の功を一簣に虧く事となりますので、婆心を以て一言致す次第であります。

私は今回微力を以て重任を負ふことになつたのであります。が、克く其の職責を盡くし得るか否かは、絶えず懸念して居つたところで、従つて斯様な歓迎を受けようとは固より豫期しなかつた所でありました。今日此の機會に於いて、敢て思ふ所を率直に吐露しましたのは、此の重大なる時局に際し、諸君と共に天下の憂を分かたんことを冀ふが爲めに外なりません。微衷の存する所を

諸君と共に天下の憂を分たんの

諒とせらるれば、幸甚の至りであります。
茲に閣下並びに諸君の御健康を祝します。

一五五 重塔

幸田露伴

幸田露伴
文學博士
名は成行
東京の人
慶應三年生

辛苦經營むなし
からず。

のつそり十兵衛
大工の名、のつ
そりは練名

時は一月の末つ方のつそり十兵衛が辛苦經營むなしからで、感
應寺生雲塔しんうんたいよく物の見事に出來上がり、段々足場を取り除け
ば、次第々々に露はるゝ一階一階また一階、五重巍然と聳えしさま、
金剛力士が魔軍を睥睨びんんで十六丈の姿を現じ、坤軸動くわがす足ぶみ
して、巖上いんじやに突立つちたる如く、天晴れ立派に建つたるかな、あら快き
細工振りかな、稀有ぢや、未曾有ぢや、再またあるまじと爲右衛門より門
番までも、初手はつてのつそりを輕しめたる事は忘れて讚歎すれば、圓道
はじめ一山の學徒も躍りあがつて歡喜よろこび、これでこそ感應寺の五

重塔なれ、あら嬉しや、我等が頼む師は當世に肩を比すべき人もな
く、八宗九宗の碩徳、達虎豹鶴鷺と勝れ給へる中なかにも、絶類拔群にて、
譬へば獅子王孔雀王、我等が頼む此の寺の塔も絶類拔群にて、奈良

蒼龍已没牛斗横 東方芒角昇 長庚演
く收筒及未曉 惟存孤蒲聲

偶有孤蒲聲

幸田露伴筆蹟

幸田露伴筆蹟

蒼龍已没牛斗横。東方芒角昇。長庚。漁人收筒及未曉。船過。惟有孤蒲聲。偶錄東坡居士詩。露伴老漁。

や京都はいさ知らず、上野淺草芝山内、江戸にて此の塔に勝るもの
なし、殊更塵土に埋もれて光も放たず終はるべかりし男を拾ひあ
げられて、心の寶珠たの輝きを世に出だされし師の美德困苦に撓ま
ず知己に酬いて、遂に仕遂げし十兵衛が頼もしさ、面白く又美はし
き奇因縁なり、妙因縁なり、天の成せしか人の成せしか、將又諸天善

神の陰にて操り給ひしか、屋を造るに巧妙なりし達賦伽尊者の噂はあれど、世尊在世の御時にも如是快き事ありしを未だ聞かねば、漢土にも聞かず、いで落成の式あらば、我れ偈を作らむ、文を作らむ、我れ歌をよみ詩をなして、頌せん、讚せん、詠ぜん、記せんと、各互に語り合ひしは、愆のみならぬ人間の情の優しくもまた殊勝なるに引替へて、測り難きは天の意、圓道爲右衛門二人が計らひとして、いと盛んなる落成式執行の日も略定まり、其の日は貴賤男女の見物を許し、貧者に剩れる金を施し、十兵衛其の他を犒ひ賞する、一方には又伎樂を奏して、世に珍らしき塔供養あるべき筈に、支度とり、なりし最中、夜半の鐘の音の曇つて、平日には似つかず耳にきたなく聞えしが、……漸々あやしき風吹き出だして、眠れる兒童も、我れ知らず夜具踏み脱ぐほど、時候生暖かくなるにつれ、雨戸のがたつく響き烈しくなりまさり、闇に揉まるゝ松柏の梢に天魔の

夜半の鐘の音の曇つて平日には似つかず耳にきたなく聞えしが……闇に揉まるゝ松柏

枯の梢に天魔の號びものすごし。

號びものすごくも、人の心の平和を奪へ、平和を奪へ、浮世の榮華に誇れる奴等の膽を破れや、睡りを攪せや、愚物の胸に血の濤打たせよ、僞物の面の紅き色奪れ、斧持てる者斧を揮へ、矛もてるもの矛を揮へ、汝等が鋭き劍は饑ゑたり、汝等劍に食を與へよ、人の膏血はよき食なり、汝等劍に飽くまで喰はせよ、飽くまで人の膏膩を餌へ、と號令きびしく發するや、否、猛風一陣どつと起こつて、斧をもつ夜又、矛もてる夜又、餓ゑたる劍もてる夜又、皆一齊に暴れ出しぬ。

長夜の夢を覺まされて、江戸四里四方の老若男女、惡風來たりとおどろきさわざ、雨戸の横柄子しつかと挿せ、辛張棒を強く張れと、家々ごとに狼狽ゆるを、あはれとも見ぬ飛天夜又王、怒號の聲音たけしく、汝等人間を憚るな、汝等人間に憚られよ。人間は我等を輕んじたり、久しく我等を卑しみたり。我等に捧ぐべき筈の定め、の牲を忘れたり。這ふかはりとして立つて行く狗、驕奢の塹巢

横柄子
辛張棒

鐵圍山
須彌山を中心と
せる諸山の最外
圍
慘酷の矛、嗔恚
の劍の刃、糞と
彼等をなし呉れ
よ。

つくれる禽、尻尾なき猿、物言ふ蛇、つゆ誠實なき狐の子、汚穢を知らざる豕の女、彼等に長く侮られて、遂に何時まで忍び得む。我等を長く侮らせて、彼等を何時まで誇らすべき。忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだけ誇らしたり。我等を縛せし機運の鐵鎖、我等を囚へし慈忍の岩窟は、我が神力にて扯斷り棄てたり、崩潰れさしたり。汝等暴れよ、今こそ暴れよ。何十年の恨みの毒氣を彼等に返せ、一時に返せ。彼等が驕慢の氣の臭さを鐵圍山外に攪んで捨てよ。彼等の頭を地につかしめよ。無慈悲の斧の刃味の好さを彼等が胸に試みよ。慘酷の矛、嗔恚の劍の刃糞と彼等をなし呉れよ。彼等が喉に氷を與へて、苦寒に怖れわな、かしめよ。彼等が膽に針を與へて、祕密の痛みに堪へざらしめよ。彼等が眼前に、彼等が生したる多くの奢侈の子孫を殺して、玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶兒の家を奪ひぬ、汝等彼等の家を奪へや。彼等

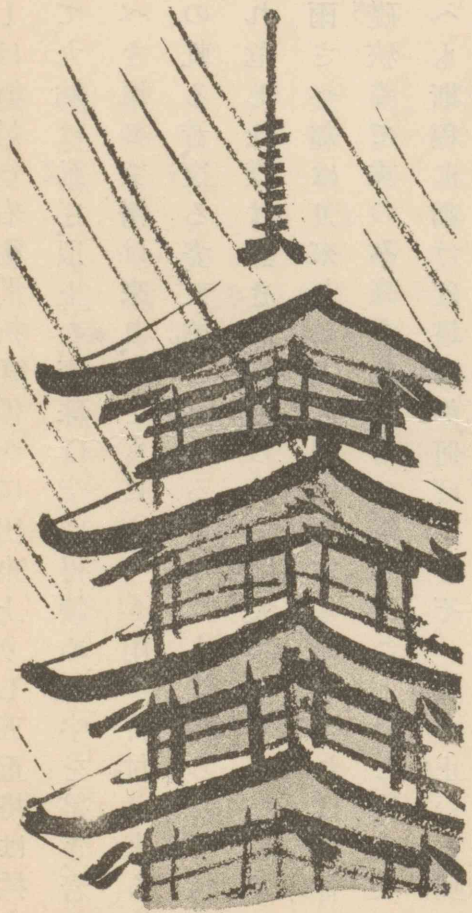
無法に住して放
逸無慚、無理無
體に暴れ立て、
進め。

は蠶兒の智慧を笑ひぬ、汝等彼等の智慧を讚せよ。すべて彼等の巧みとおもへる智慧を讚せよ。大とおもへる意を讚せよ。美はしと自らおもへる情を讚せよ。協へりとなす理を讚せよ。剛しとなせる力を讚せよ。すべては我等の矛の餌なれば、劍の餌なれば、斧の餌なれば、讚して後に利器に餌ひ、よき餌を作りし彼等を笑へ。罨らるゝだけ彼等を罨れ。急に屠るな、罨り殺せ。活かしなからに一枚一枚皮を剥ぎ取れ、肉を剥ぎ取れ。彼等が心臓を鞠として蹴よ、枳棘をもて背を鞭てよ。歎息の呼氣、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、其等をすべて人間より取れ。残忍の外快樂なし。酷烈ならずば、汝等疾く死ね。暴れよ、進めよ、無法に住して放逸無慚、無理無體に暴れ立て、暴れ立て、進め進め。神とも戦へ佛をも擲け。道理を壞つて壞りすてなば、天下は我等がものなるぞと、叱咤する度、土石を飛ばして、丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも、毫

も止まず勵ましたつれば、數萬の眷族勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に黄ばまして、日の光りをもほとと、掩ひ斧を揮つて、數寄者が手入れ怠りなき松を、冷笑ひつゝ、ほつきと斫るあり。矛を舞はして板屋根に忽ち穴を穿つもあり。ゆさくくと怪力もて、さも堅固なる家を動かし、橋を揺がす者もあり。手ぬるしく、酷さが足らぬ、我れに續け」と憤怒の牙嚙み鳴らしつゝ、夜叉王の躍り上つて焦躁てば、虚空に充ち満ちたる眷屬をたけび鋭くをめき叫んで、遮二無二暴威を揮ふ程に、神前寺内に立てる樹も、富家の庭に養はれし樹も、聲振り絞つて泣き悲しみ、見るく大地の髪の毛は、恐怖に一々豎立なし、柳は倒れ竹は割るゝ、折しも黒雲空に流れて、檜の實より大きな雨ばらりくくと降り出せば、得たりと益々暴るゝ、夜叉垣を引き捨て、塀を蹴倒し、門をも破し、屋根をもめくり、軒端の瓦を踏み碎き、唯だ一

狼籍のあらん限りを逞しうす。

揉みに屑屋を飛ばし、二々揉み揉んでは二階を捻ち取り、三たび揉んでは某寺を物の見事に潰し崩し、どうくどつと関をあぐる、其の度毎に、心を冷やし、胸を騒がす人々の、彼れに氣づかひ、此れに案ずる笑止の様を見ては喜び、居所さへも無くされて、悲むものを見ては喜び、いよゝゝ圖に乗り、狼藉のあらん限りを逞しうすれば、八



百八町百
萬の人皆
生ける心
地せず顔
色更にあ
らばこそ。
中にも分
けて驚き

しは圓道爲右衛門、折角僅かに出來上りし五重塔は揉まれ揉まれ
 て、九輪は動き、頂上の寶珠は空に得讀めぬ字を書き、岩をも轉ばす
 べき風の突掛け來り、楯をも貫くべき雨の打付り來る度、撓む姿、木
 の軋る音、復る姿、又撓む姿、軋る音、今にも傾覆らんず様子に、あれあ
 れ危し仕様は無きか、傾覆られては大事なり、止むる術もなき事か、
 雨さへ加はり來りし上、周圍に樹木もあらざれば、未曾有の風に、基
 礎狭くて丈のみ高き此の塔の、堪へんこといと覺束なし。本堂さ
 へも斯程に動けば、塔は如何ばかりぞ。風を止むる呪文はきかぬ
 か。かく恐ろしき大暴風雨に、見舞に來べき源太は見えぬか。ま
 だ新しき出入なりとて、重々來ては叶はざる十兵衛見えぬが寛怠
 なり。他さへ斯程氣づかふに、己が爲し塔氣にかけぬか。あれあ
 れ危し、また撓んだは。誰れか十兵衛招びに行け。とはいへ天に瓦
 飛び、板飛び、地上に砂利の舞ふ中を行かんといふものなく、漸く衰

美の金に飽かして掃除人の七藏爺を出だしやりぬ。

『五重塔』

一六 塔 影

河 井 醉 茗

河井醉茗

詩人

名は又平

泉州堺の人

明治七年生

墨繩たゞす番匠が、

掌の上につくられて、

朝、狭霧の晴れゆけば、

寶珠を天に捧げ持ち、

岸に聳ゆる五層塔。

藏めし經も蠹みて、

供養忘れし澆季の世の、

雲をさへぎる勾欄に、

澆季の世

清き鉤の痕見れば、
塵に氣韻も残るかな。

秋は露盤に露うけて、
扉は神祕に閉されぬ。

四天の神に守護られて
金輪際に根を埋め、

夜は北斗をうかゞへり。

家に住まざる山鳩の
巢くふに處得たればか、
虚空杳かに翔れども、
畫棟の朱の古びたる

畫棟の朱

金輪際

四天の神

浮圖を慕うて歸るらん。

落暉は西に傾いて、

五重の屋根の歴然に、
重なりうつる草の上、

月は廂に浮かび出で、
九輪の影は水に在り。

雲の崖より吹き落ちて、

風湖を拭ひ去る、

波の面に刻まれし、

アートの花に咲きちらふ、

時の力の遠きかな。

九輪の影

その世に媚びし歌反古は、
曆の嵐に破れたり。
生命の岸を下に見て、
天に呼吸する塔の
高き姿を水に見よ。

『醉茗詩集』

田澤湖
秋田縣仙北郡

一七 田澤湖遊記 その一

吾等は上野を發つて眞直に秋田の田澤湖に向つた。そして八月二日の丁度正午時分に、湖の東岸なる白濱に着いた。「白濱」の名は、此の邊一帶の汀が水晶のやうな白い砂で縁どられて居るところから起こつたので、一つは、赤い砂や黒い砂利で縁どられた北つづきの沿岸を赤濱、黒濱と呼ぶのに對したのであらう。吾等は直

ちに唯だ一つある湖畔の旅館、湖心亭といふに落ちついた。そして見晴らしの二階に登つて、この名高い湖水に初對面の挨拶をした。田澤湖は周回五里に足らぬ小さい湖水ではあるが、日本一といはるべき三つの特色を持つて居る。第一は四百二十五メートルといふ深さである。第二は水の透明なる事、第三は水色の美しい事であるが、この第二、第三の點に於いては、日本一であるのみならず、同時に世界一であると云はれて居る。田澤湖はまた陥落湖と稱せられて、岸邊を一寸離れるともうすぐ切り落したやうに三百尺からの深さになつて居り、それから段々深さを増して中央の最深部に達するので、驚くべき多量の水を湛へて居る。そして其の表面は、委しくいふと、周回四里三十五町四十一間、直徑は何處でも大抵一里十九町餘り、即ち殆んど眞丸い形を成して、緩く波を打つた小さい青い山々に、隙間もなく圍まれて居るのである。青垣

青垣山に取り圍

まれた圓い鏡のやうな湖水、カン／＼と照りかがやく眞夏の眞晝目を浴びて、銀のやうに光つて居る湖水、これが吾等の目に始めて映つた田澤湖であつた。

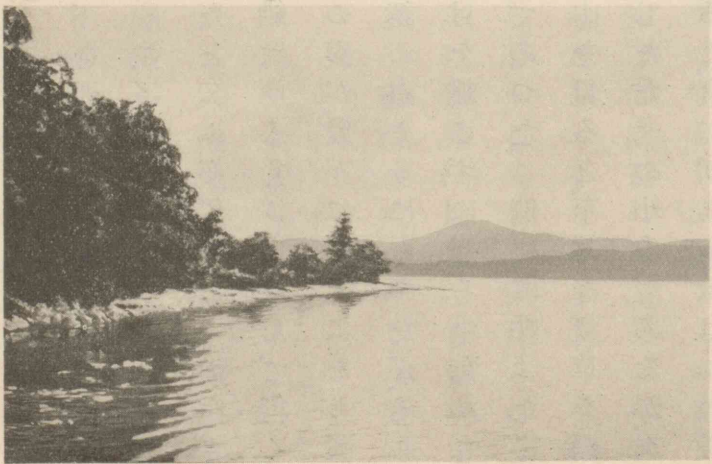
山に取り圍まれた圓い鏡のやうな湖水、カン／＼と照りかがやく眞夏の眞晝目を浴びて、銀のやうに光つて居る湖水、これが吾等の目に始めて映つた田澤湖であつた。

吾等は此の湖水に産する國鱒、一名を木尻鱒といふ、穢らしい、生臭い、諺の通り甚だ旨からざる名物の魚で、簡単に晝餐をしたゝめて後、發動機船に乗つて湖水廻りの遊覽に出かけた。二時半時分であつたであらう。沿岸の名所全體を見るには三時間餘を要するといふことである。

舟は右から廻ることにして、まづ北西の方に向つた。岸邊の見物は、まづ白い砂濱のきら／＼するあざやかな眺めに始まつて、やがて赤い濱の美しい眺めに移り、つゞいて地味な黒濱に移るのである。黒濱にかゝつてから少し行くと、船頭が、船の速力をゆるめて「此處が五百羅漢で御座います」といつた。云はれるまゝに岸の

方を見ると、謂はゆる黒濱の黒い石塊と、平凡な灌木喬木と、そして更に平凡な小山との外には何も無い。私は怪しんで、「五百羅漢といふのはどれだ」と尋ねたが、船頭の答は意外であつた。

「いゝえ、羅漢様が此の水の底に見えるのですよ。此の湖水は陥落湖とか申しましてね、岸を離れるとすぐに恐ろしく深い崖になつて居りますが、其の水の中の崖の巖が羅漢様に見えるといふので御座います。これは、波が靜かて、日が眞上から射すやうな時で



田澤湖白濱の松

ないと、めつたに拜まれないので、此の羅漢様を御覽になるのは、餘程運の好い御方で御座います。」

といふ。「さうか、それは珍らしい。」と、下を覗いて見ると、いかさま羅漢らしい無数の巨像が水中の岸壁に並び立つて居られた。謂はば京都の三十三間堂を水中に移したと云ふ形である。面白さに瞬きもせず水中に見入つて居ると、船はゆるく／＼進んで行く。行くに随つて彫刻らしい岸壁の面の襞が、段々に平凡になり、薄くなり、平らになつて、果ては何物をも認めぬやうになつたが、それでも名残の床しさに暫らく水中から目を離さずに居る中、驚かされたのは、水中に映る山の影の美しさであつた。倒まに映つた影の美に驚かされて、首をあげて本物の山を見ると、平凡な夏草を纏ひ、平凡な樹木と平凡な岩石とを點綴した、たゞの小山であるが、又うつむいて、それが水に映つたのを見ると、實に何とも云はれぬ美し

言語道斷の美

さである。それは誠に言語道斷の美で、何とも云ふことは出来ぬが、強ひて云はゞ、其の特別な綠色の味ひは、廣重の風景畫のそれに似て、更に奥深い味をもつて居るとも云ふべきであらう。あの凡山凡木、凡石が一旦水中の影となると、どうして斯う美化されるのか、私にはわからないが、多分此の湖水の世界に比類なき透明さと、美しさと、水際からの驚くべき深さとが、相待つて、かやうな微妙な美化作用を與へるのであらう。

「綺麗ぢやないか！」

「ほんとに不思議ですなあ！」

「これはえらい。田澤湖の美は水底にある。」

などと、吾等は水中の廣重にすつかり傾倒して、時の過ぎるのも忘れて居る中に、船はいつしか「御座、石」に着いた。白濱を發つてから、もう四五十分を過ぎたらしい。

吾等は水中の廣重にすつかり傾倒した。

岩間から湧き出
でる清冽な泉を
掬んだ。



田澤湖御座石神社

「御座石」は凝灰岩の扁平な石疊で、廣さは四五百坪もあるであらう。水面よりホンの少し高いばかりで、處々の深く喰ひ込んだ裂目は、無限に深い水底を覗かせて、人の魂を冷やしてゐる。岩の上には巖島まがひの大鳥居が立つてゐて、奥には木立の間に御座石神社が齋かれてある。此の湖水の主なる龍神を祭つたのである。吾等は神社を拜し、岩間から湧き出でる清冽な泉―延命水―を掬びなどして遊んでゐたが、しばらくして、船に乗らうとすると、何

Niagara Falls
米國東北境の大
瀑布

處ともなく遠雷の微かに響くのが聞こえて來た。同時に、もと來た方角にあたり、片足を山際にかけて、片足を湖水の中にかけて、大きな虹のあざやかに現はれたのを見出した。同時に、更に湖水の向うの真中に、二三間位の高さに見える眞白な長い橋のやうなものが現はれて、岸と岸とを遙かに繋いだのを見出した。此の長橋は、或は白布を懸け並べたかのやうにも見える。或はナイヤガラ式の限りなく廣大な瀑布のやうにも見える。とにかく一里十九町の長さに亘る、白布のやうな、橋のやうな、瀑布のやうなものであるが、それが刻々に此方を指して近づいて來るのであつた。私は驚いて船頭に尋ねた。

「あの白い長いものは何だらう。」
「あれですか。あれは夕立で御座いますよ。直にこゝにやつて來ますわ。」

大雨の打撃に水が應じて、其のしぶきの狭霧が、岸から岸に連なる一里十九町の大橋梁を架し、大瀑布を懸けた。

吾等はまた驚かされた。いかにも夕立である。大夕立である。田澤の湖と山と空とを壓して、區切つたやうに着々と押寄せて來る大夕立である。山中の大雨が、大雷に鼓吹され、大山風に煽られて、漫々たる湖水の面に、遠慮もなくぶつかるとだ。大雨の打撃に水が應じて、其のしぶきの狭霧が、岸から岸に連なる一里十九町の大橋梁を架し、大瀑布を懸けるのも當然の事であらう。

船頭は「もうすぐ來ますよ。神社に暫らく休んで、やり過ごしてから出かけませう」と云つて、蒲團や蓆座をかゝへて社殿に引き上げた。吾等も後からつゝいた。

さる程に、しぶきの大瀑布は刻々に近づいて來る。遠雷は次第に近く耳を壓して、大瀑布の上の黒雲からは、雷光がすさまじく光り出した。其のガラ／＼とピカ／＼とが矢繼早に烈しくなつたと思ふ途端に、長堤のやうな大瀑布が湖岸にどつと崩れて、御座石

篠つくやうな大驟雨が、木をしだき山をとよもして、ザア／＼と襲つて來た。

の沿岸が一ぱいの白泡になり、同時に篠つくやうな大驟雨が、木をしだき山をとよもして、ザア／＼と襲つて來た。雷鳴と、電光と、恐ろしい雨と風とのほしいまゝに亂舞混闘する壯烈な光景が、しばらく續いた。

一八 田澤湖遊記 その二

小さい拜殿の内に小さくなつてゐた吾等が、靜かに落ちる簷の雨を算へ、夕日を浴びた濡れ木立の中で鯛のさはやかに啼くのを聞いたのは、四五十分の後であつたであらう。吾等は餘れる夕日影を無駄にすまじく、急いで船に乗つて殘部の名所へと志した。雨後の船上の涼しさはまた格別であつた。殊に今の夕立の回顧は堪らない嬉しさを感じしめた。不幸災厄でさへも、思出と

仙北郡
秋田縣

なれば美しい後光がさして來るといふではないか。況んや千載一遇の奇觀とも絶景ともいふべき、此の大湖水を横斷した大橋梁、大瀑布の回顧をやである。昔、秋田の佐竹義和公が、此の湖水を遊覽して、御座、石から白濱に向つた時に、大雷雨に逢はれたが、心きいた家老の疋田齊といふ者が、頓智の御條目を讀み上げて、神を詰つたので、忽ち快晴したといふ傳説がある。そして其の御條目は此の御座、石神社の寶物になつて居るが、其の文句は左の通りで、

御意の爲め申達し候は、此度仙北郡御巡覽遊ばされ候に付き、かねて其の方へ預け置かれ候瀉、此の湖水の事御一覽成し置かれ候儀、其方に於いても別して難有存じ奉るべき處、風雨をおこし、剩へ雷共を呼び出し、入らざる御馳走振、甚だ以て御不興の御事に候。若し快晴に致し難きに於いては、六郡の人夫を率ゐ、我等下知せしめ、早々其方儀追放に及ぶべきもの也。

(八月、疋田齊、田澤湖龍神殿)

かういふ珍文を讀み上げたといふが、吾等に取つては、此の大夕立、大雷鳴こそ何物にも換へ難き龍神の御馳走であつた。など考へつゝ、そして遙かに御座、石を拜しつゝ、漕ぎ出でたが、舟の機關に故障が出來たので、據ろなく引返して白濱に歸つて來た。

湯をあびて、折しもさしのぼる月を眺めつゝ、杯を舉げた氣持は、また格別であつた。食事をすましてから、涼風に吹かれて白濱をぶらつきながら、月下の湖水を賞した心持は、更に格別であつた。

吾等は、翌くる朝、未明の湖水を賞し、朝日を迎へた湖水を賞し、朝靄の晴れ行く湖水を賞した。そして八時頃からは、昨日見残した名所を見るべく、再び船を雇つて遊覽に出かけた。今度は左手の方から廻つて、蛙石、夫婦石、千歳杉、瀉尻かたじり、漢槎宮かんさく、浮木等を見たが、晴天の下の湖水、殊に波の立つた湖水には、更に吾々の心を惹くものが

風に皺よる水の底には、沿岸の山も、木も、石も、更に變相幻化の廣重を見せなかつた。

なかつた。最後には、御座、石から五百羅漢、黒濱、赤濱、白濱と、昨日感嘆した名所を逆まに見て來たが、今日の彼等は、昨日の彼等とは、まるで物が違つたやうに平々凡々で、何の見どころもなかつた。夕立のない、虹のない、雷のない、長橋、瀑布のない御座、石は、たゞの御座、石であつたのである。波のある湖底の五百羅漢は、たゞの水中の懸崖であつたのである。風に皺よる水の底には、沿岸の山も、木も、石も、更に變相幻化の廣重を見せなかつたのである。吾等は昨日の驟雨前後の美しい夢を、今日の白日下の平凡な現にすつかり破られて、悄然として白濱の宿に歸つた。そして又生くさい木尻鱒を主食とした名残の晝餐に腹を拵へ、二日の御馴染の田澤湖に「おさらば」を告げて、秋田に向つた。

此の二日の湖水遊びについて吾等の特に感じた事の一つは、物

見どころが大切、見やうが大

湖沼の美觀は朝夕にあつて、日中にはない。晴れの日中は湖沼が最も平凡な月並姿を見せる時である。

事何でも見どころが大切だといふことである。見やうが大切だといふ事も、自然それに附帶して云はれるであらう。私は曾て湖沼學者の田中阿歌麿氏が書いて居られるのを見たことがある。湖沼の美觀は朝夕にあつて、日中にはない。晴れの日中は湖沼が最も平凡な月並姿を見せる時である。唯だ、有るべき物が有るやうにあるといふ状態を、機械的に圖解的に見せるといふだけの時である。之れに對して、朝や、夕や、夜や、雨や、風や、雪の折は、湖沼が取るべき姿を見せる時である。特別な外境に觸れて、奥深く隠れてゐた特別な持前を現はす時である。眠から覺める湖、朝靄の消えるにつれ、靜的の湖水が段々動的活動に入つて、鳥が歌ひ、風が吹き、波が立ち、船が動く趣、動ける湖水が段々再び靜かになつて夜の帷に包まるゝ趣、明月の湖、朧月夜の湖、朝日に榮える湖、夕映に金色の波を漂はす湖、暴風雨に怒る湖、霜に互える湖、かういふ變はつた姿

袴を着た街道湯漬の挨拶。

を見なければ、眞實の湖水を見たとは云へないのに、湖水遊覽者の大多數が、眞晝の平凡相のみを見て歸り、しかも其の平凡相を其の湖水の眞相として、其の湖水の美として吹聴し批評するのは片腹いたいことである。いかにもさうであらう。

人を見るにも、書物を見るにも、同じ事で、袴を着た街道湯漬の挨拶によつて、其の人の性格を批判し、文字の表面だけを見て書物の價値を批判するなどは、随分と危いことであらうと思ふ。話がつい横に逸れたが、吾等は此の湖水遊びに於いて、まづ田澤湖の正午の平凡普通の姿によつて迎へられた。次ぎには暴風雨の前の靜かな空氣の中に於いて、鏡のやうな水の底に見える、懸崖の羅漢や、幻のやうな美しい山の影を見せられ、やがて大夕立を中心とした虹の穹橋瀑布の長橋、雷鳴、電光、疾風、狂雨の大活劇でもてなされ、つづいて雨後の涼しさを悦ばされた上に、其の夜は満月の下に展開

物には他の眞似られぬ特色のあるもの。

した美しい湖水を見せられ、そして最後には再び袴羽織を着けた無事平正な挨拶に送られて、此の湖水を辭する事になつたのである。夏の旅であるから、無論秋の紅葉や、春の花や、冬の雪の趣は見られなかつたが、凡そ此の湖水が夏の間に現はす面白い曲姿は、この二日一夜の間に取り揃へて見せられたと云つてもよいであらう。私はこの湖水の恩賚に感謝せずには居られない。

此の遊びについて吾等の感じたもう一つは、物には何にても、他の眞似られぬ特色のあるものだといふ事である。そして其の特色は何等かの機會を得て必ず自然に現はれるものだ、といふ事である。折角の大きい自然美を小さい個人の教訓などに應用するのは甚だ面白くないが、吾等は、人間も其の通りで、吾々も是非自分の天賦を見出だして、其處に人眞似の出來ぬ特色を築かねばならぬ、そして其の特色の發表は成るべく自然の機會を待つべきで、故

意の宣傳は慎むべきものだと思つて居る。吾等は國內だけでは、今までに可なり多くの名勝を見たが、豫め吹聴された勝地へ行つて、其の吹聴された個條に感服したことはめつたにない。吾等は頼山陽の吹聴に引かされて、遙々と耶馬溪へ出かけたが、一種の幻滅を感じて歸つて來た。二見ヶ浦、和歌の浦なども、其の一つである。之れに反して、或る勝地が少しも吹聴宣傳をせずに、有つて居た特色、人目にさらすのを恐れるかのやうに懷に秘めて愛護してゐた美點を、或る機會に、求めずして發見するのは、非常な愉快で、何とも云はれぬ尊い床しさを感じさせる。田澤湖についても、多くの案内記、旅行記は、神祕的とか、女性的とか云つて、いろいろの效能を並べて居るが、私は實際に見て、其等の一つにも、感心しなかつた。沿岸の名所としても、蛙石、靄森、夫婦石、兜石、千歳杉、漢槎宮、瀉尻槎木神社など、其の他いろいろと御託宣は並べて居るが、それは大抵其

の地方の人の國びいきて、公平に云つて特に見るに足るやうなもの、は殆んど一つもない。吾等がもし、水中倒影の美に驚かされず、驟雨の現じた絶大の奇景に驚かされずは、此の湖水をば、或は一顧の値なきものとして、呆れたまゝに歸つたのであらうが、圖らずも豫期せざる光景に接して、不思議の愛着を感じるやうになつた。秘められたる美點、賣物にされない特色の、自然偶然の發露が、特別の床しさを感じさせたのであらうと思ふ。

〔遠近〕

一九 芳流閣

瀧澤馬琴

瀧澤馬琴
江戸時代の小説家
曲亭馬琴と號す。
名は解、
嘉永元年歿
年八十二
古の人謂はずや
禍福は糾へる繩

古の人謂はずや禍福は糾へる繩の如し、人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。それは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼れにあれば此れにあり、とは思へども豫てより、誰れかよくその極を知

の如し、人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。

滯我 下總國猿島郡古河町



滯馬琴

らん。憐れむべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身に傳けつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、はるく、滯我へもたらして、名を揚げ、家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の刃は、舊の物ならで、我が身を劈く響とぞなりし、憾をこゝに釋くよしもなく、猝急にして、意外にあり。僅かに當座の辱めを、避けばやと思ふばかりに、影の圍を殺開きて、芳流閣の屋の上に、攀ち上れども左右に、脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を究めたる、心中はいかなりけん、想像るだにいと痛まし。

されば又、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役

足下遠く、雲近く、照る日烈しく、堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、燄熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、



馬琴筆犬傳挿畫下圖

層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく、堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、燄熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、溯洄は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶えて、進退すてに谷りし、敵にしあればいかでわれ、繋ぎ留めんと、颯の、樹傳ふ如くさらくと、登りはてたる三層の、屋根には

こゝ生死の海に
朝る、流れは名
に負ふ坂東太
郎。

成氏

古河公方足利成

氏

横堀史在村

成氏の老臣

墨氏

墨翟、周の人

魯般

公輸般、魯の人

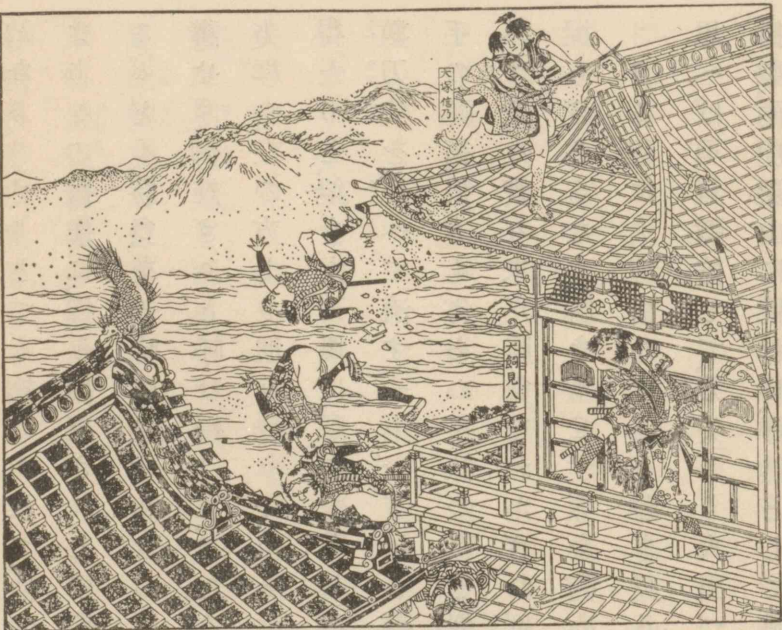
目柴翳す由もなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視へあうて立つたる形勢、
浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の窺ふに似たりけり。
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に尻
を打ち掛けて、勝負いかにと見上げたる。又只闇の東西には、身甲
したる許多の士卒、槍、長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突き立て、組
んで落ちなば撃ち留めんとて、項を反らしてこれを觀る。加之外
面は、連綿として杳かなる、河水繞りて砌を浸せば、借使信乃武事長
け、膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、
虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なれば、地上に下るべ
くもあらず。渠鳥ならずとも羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。
三寸息絶ゆれば、絆みな休まん、脱れはてじと見えたりけり。
その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひ登らんとせし
兵等を、砍落しつる後は、絶えて近づく者なきに、今たゞ獨り登り來

膳臣巴提便

欽明天皇七年百
濟に使した時、
虎穴に入りて虎
を刺殺した。

富田三郎

和田義盛の臣、
源實朝の面前で
大鹿の二本の角
を一度に折れ
り。



ぬるは、世に覺えある力士な
らん。這奴は是れ、膳臣巴提
便が、虎を暴にする勇あるか、
また富田三郎が、鹿の角を裂
く力あるか。遮莫一個の敵
なり、引組んで刺迭へ、死する
に難き事やはある。よき敵
にこそござんなれ、目に物見
せんと血刀を、袴の稜もて推
拭ひ、高瀬の如き方桴に、立つ
たる儘に寄するを俟てば、見
八も亦思ふやう、彼の犬塚が
武藝勇悍、素より萬夫不當の

兩虎深山に挑む

敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出だされし甲斐もなし。搦め捕るとも撃たるゝとも、勝負を一時に決せんものを、と思ひにければちつとも擬議せず、御誼さふと呼び掛けて、拿たる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。心得たりと、鋭き太刀風に、撃つを發石と受け留めて、拂へば透かさず。數刀尖を、拄へて流す一上一下、迂る蔓を踏み駐めて、頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手練の働、岌より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬きもせず氣を籠めて、見る目もいと々迫かなる。さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌倍して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に戰ふ時、沛然

時、錚然として
風發り、二龍青
潭に闘ふ時、沛
然として雲起
る。

として雲起こるも、かくぞあるべき、春ならば峰の霞か、夏なれば夕の虹か、と見るばかりなる、いと高閣の棟にして、死を争ひし爲體よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖肱當のはづれを、裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初めに淺瘡を負ひしより、漸々に疼みを覺ゆれども、足場を掃りて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと被けたる聲とともに、眉間を望みて礮と打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鏢際より、折れて遙かに飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引き着けて、迭に利腕楚と取り、振ぢ倒さんと曳聲合はして、揉みつ揉まるゝ力足、此彼ひとしく踏み込らして、河邊の方へ滾々と、身を輾ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる蔓の勢ひ、止まるべくもあらざめれど、迭に拿つたる拳を緩めず、

幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打累りつゝ、挫と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙、纜丁と張り斷りて、射る矢の如き早河の、真中へ吐き出だされつ。爾も追風と虚潮に、誘ふ水なる洄舟、行方も知らずなりにけり。

〔南總里見八犬傳〕

二〇 心機一轉

芥川龍之介

芥川龍之介
大正昭和の小説家
東京の人
昭和二年歿
年三十六

華山
渡邊登
畫家、蘭學者
田原侯三宅氏の
家臣で、家老に
上つた。
天保十二年歿
年四十九

華山が歸つた後で、馬琴はまだ残つて居る興奮を力に、八犬傳の稿をつぐべく何時ものやうに机に向つた。先を書きつゞける前に、昨日書いた所を一通り読み返すのが、彼れの昔からの習慣である。そこで彼れは今日も細い行の間へ、一面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり読み返した。

書いてある事が、自分の心もちとびつたり來ない。

すると、何故か書いてある事が、自分の心もちとびつたり來ない。字と字との間に不純な雑音が潜んでゐて、それが全體の調和を到る所で破つてゐる。彼れは最初それを、彼れの癩の昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の己の心もちが悪いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れる所まで、書き切つてゐる筈だから。」

さう思つて、彼れはもう一度読み返した。が、調子の狂つてゐる事は、前と一向變はりがない。彼れは老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

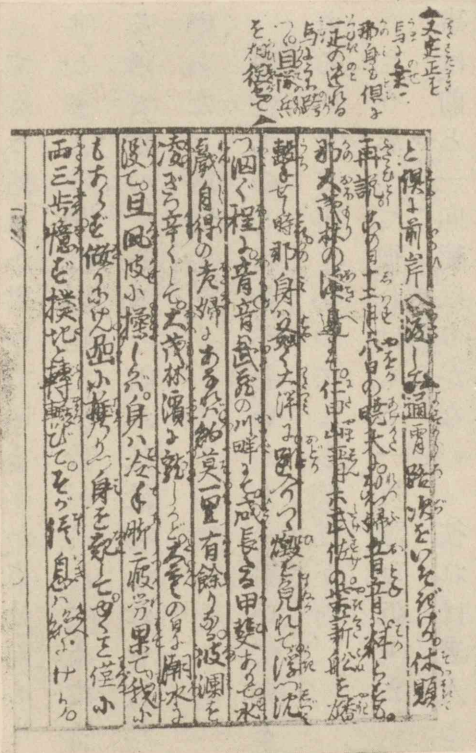
「このもう一つ前は、どうだらう？」

彼れはその前に書いた所へ、眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雑な文句ばかりが、糅然としてちらかつてゐる。彼れは更にその前を讀んだ。さうして又その前の前を讀んだ。

徒らに粗雑な文句ばかりが、糅然としてちらかつてゐる。

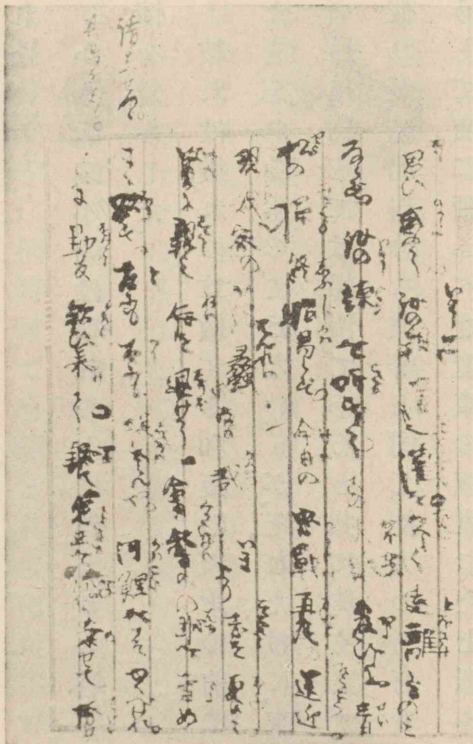
讀むに従つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して来る。

何等の映像をも與へない叙景、何等の感激をも含まない詠歎、何等の理路をも辿らない論辯。



稿原傳犬八琴馬

しかし讀むに従つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して来る。そこには、何等の映像をも與へない叙景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼れが數日を費やして書き上げた何回分の原稿は、今の彼れの眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼れは急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。
「これは初めから書き直すより外はない。」



稿原の時當明失同

彼れは心の中でかう叫びながら、思々しさうに原稿を向うへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼れはこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、臺の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は皆、彼れの創作の苦しみに、久しい以前から親し

弓張月
棒説弓張月
源爲朝を主人公とせる小説
南柯夢
三七全傳南柯夢
繪入讀本六册

暗い影を投げる
忌まはしい不安
を、禁ずる事が
出来ない。
本朝に比倫を絶
した大作。
人並に己惚れの
一つだつた。

かういふ不安は
彼れの上に何よ
りも堪へ難い、
落莫たる孤獨の
情を齎らした。
彼れは同時代の
屑々たる作者輩
に對しては、傲
慢であると共に、
飽くまでも不遜
である。
厭ふべき遼東の
豕。

んでゐる。それらの物を見るにつけても、彼れは自ら、今の失敗が彼れの一生の勞作に暗い影を投げるやうな――彼れ自身の實力が根本的に怪しいやうな――忌まはしい不安を、禁ずる事が出来ない。「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり、事によると、人並に己惚の一つだつたかも知れない。」

かう云ふ不安は、彼れの上に何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎らした。

彼れは彼れの尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。その彼れが、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたと云ふ事を、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたと云ふ事を、どうして安々と

彼れの「我」は
「悟り」と「諦め」
とに避難するに
は、餘りに情熱
に溢れてゐる。

彼れは親船の沈
むのを見る難破
した船長の眼
で、失敗した原
稿を眺めなが
ら、靜かに絶望
の威力と戦ひつ
づけた。
憂鬱な気分の中
に鎖される。

認められよう。しかも彼れの強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

彼れは机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひつづけた。もしこの時、彼れの後ろの襖がけたゝましく開け放されなかつたら、さうして「お祖父様只今」と云ふ聲と共に、柔かい小さな手が彼れの頸へ抱きつかなくなかつたら、彼れは恐らくこの憂鬱な気分の中に、何時までも鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、小供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ、勢よく飛び上がった。

「お祖父様只今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな

宗伯
松前侯の藩醫

悦びが輝いた。
茶の間の方では、痾高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が、賑やかに聞こえてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から伴の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね、」

栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう云ひ出した。考へようとする努力と笑ひたいのを耐へようとする努力とで、醫が何度も消えたり現はれたりする。誘ふやうな氣がした。
「よく毎日。」

考へようとする努力と笑ひたいのを耐へようとする努力とで、醫が何度も消えたり現はれたりする。

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」

馬琴はとう／＼噴き出した。が、笑の中ですぐ又語をつぎながら、

「それから？」

「それから……えゝと……痾癢を起こしちやいけませんツて。」

「おやく、それきりかい？」

「まだあるの。」

太郎はかう云つて、糸鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小さな齧をよせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんな事を考へた。さうしてそれが、更に又彼れの心を

眼を細くして、白い齒を出して、小さな齧をよせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間

の人間のやうな
憐むべき顔にな
らうとは、どう
しても思はれな
い。
幸福な意識に溺
れる。

揶つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね、いろんな事があるの。」

「どんな事が？」

「え、と……お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりませうから？」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいって。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず、眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、ようやく辛抱なさいって。」

「誰れがそんな事を云つたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼れの顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。さうさな、今日は御佛參に行つたのだから、御寺の坊
さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げなが
ら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の觀音様がさう云つたの。」

かう云ふと共に、この子供は家内中に聞こえさうな聲で、嬉しさ
うに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼れの
側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小
さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行
つた。

嚴肅な何物かが
刹那に閃いた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。彼れの唇には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に彼れの眼には、何時か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼れの問ふ所ではない。この時、この孫の口から、かういふのを聞いたのが、不思議なのである。「観音様がさう云つたか。勉強しろ。痼癢を起こすな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら子供のやうになづいた。

〔戯作三昧〕

二 才 藝

或る人いはく、本より其の道々の家に生れぬるはさる事なり。

氏を繼がんが爲
め、道に至らん
が爲めに、彼れ
も、是れも共に
勵むべし。

桃李は一旦の榮
華なり、松樹は
千年の貞木な
り。

さなき類ひもほどくにつけて、能は必ずあるべきなり。中にも氏をうけたる者、藝おろかにして氏をつがぬ類ひあり、道にあらざる類ひ、能によりて道に至る徳もあれば、氏をつがながため、道に至らんがために、彼れも是れも、共に勵むべし。何となく居まじりたる折は、そのけぢめ見えざれども、藝能につけて召しも出だされ、唯だうちある我れどちの遊びにも、かたへに抜け出でて、何事をもしたらんは、雲泥の心地して、人目いみじく覚えぬべし。すべて、みめよく品高けれども、あやしく賤しきが、能あるに立ちならぶ折は、その品そのみめも、必ず思ひけたるゝものなり。たとへば、花のあたりの常磐木は、うち見るに、たとへなくさめたれども、春の日かずくれ、峯の嵐過ぎたる後に、緑ばかり残りて、かりのにほひ留まらざるが如し。されば桃李は一旦の榮華なり、松樹は千年の貞木なりといへり。いみじくありて身の能なきが、一人あるを見るだに、能あ

るを思ひ出づるならひなり。況んや能にならぶ折のけぢめをや。いかに況んや同じ様なるが、一人は能ありて一人は能なきをや。中にも世の中のかはり行くさま、昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ、道々の藝能も亦父祖には及びがたき習ひなれば、藍よりも青からん事はまことに稀なりといへども、形の如くなりとも箕裘の業を繼がざらむ、口惜しかりぬべし。

〔十訓抄〕

二二 頼 政

世 阿 彌

前シテ 老翁 ワキ 旅僧 後シテ 源三位頼政

ワキ詞「是れは諸國一見の僧にて候。我れ此の程は都に候ひて、洛陽の寺社残りなく拜み廻りて候。又是れより南都に參らばやと思ひ候。道行天雲の稻荷の社伏しをがみ、稻荷の社伏しをがみ、猶ほ行

世阿彌
室町時代著名の
能役者、謡曲作
者
本名結崎元清
足利義滿、義政
に仕ふ
康正元年歿
年八十一

此の一章の句讀
は特に謄本のま
まに施した。

末は深草や木幡こはたの關を今越えて、伏見野澤田見え渡る、水の水みづ上尋ねきて、宇治の里にも着きにけり、宇治の里にも着きにけり。ワキわきげにや遠國とんごくにて聞き及びにし宇治の里、山の姿川の流れ、遠とんの里橋の景色、見所多き名所かな。あはれ里人の來り候へかし。

シテ詞「なうく、御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「是れは此の所はじめ一見の者にて候。此の宇治の里に於いて、名所舊跡残りなく御教へ候へ。シテ「所には住み候へども、いやしき宇治の里人なれば、名所とも舊跡とも、いさ白波の宇治の川に、舟と橋とは有りながら、渡りかねたる世の中に、住むばかりなる名所舊跡、何とか答へ申すべき。ワキ詞「いやさやうには承り候へども、勸學院の雀は蒙求を囀るといへり。所の人にてましませば、御心にくうこそ候へ。先づ喜撰法師きせんが住みける庵は、いづくの程にて候ぞ。シテ詞「さればこそ大事の事を御尋ねあれ。かの喜撰法師が歌に、我が庵は都の異しか

名にも似ず月こそ出づれ朝日山。
山も川も、おぼろおぼろとして是非をわかぬ景色かな。

ぞ住む世を宇治山と人はいふなり。人はいふなりとこそ、主だにも申し候へ。尉は知らず候。ワキ、又あれに一村の里の見えて候は槇の島候か。シテ、さん候槇の島とも申し、又宇治の河島とも申すなり。ワキ、是れに見えたる小島が崎は。シテ、名にたちばなの小島が崎ワキ、向ひに見えたる寺は、いかさま惠心の僧都の御法を説きし寺候な。シテ、ならく旅人あれ御覽ぜよ。歌名にも似ず月こそ出づれ朝日山、地月こそ出づれ朝日山、山吹の瀬に影見えて、雪さし下す島小舟、山も川も、おぼろくとして是非を分かぬ氣色かな。げにや名にし負ふ、都にちかき宇治の里、聞きしにまさる名所かな、聞きしにまさる名所かな。
シテ、詞「いかに申し候。此の所に平等院と申す御寺の候御覽ぜられ候か。ワキ、詞、不知案内の事にて候程に、未だ見ず候ふ御教へ候へ。シテ、此方へ御出て候へ。是れこそ平等院にて候へ。又是れなるは

さしも文武に名を得し人なれども、跡は草露の道の邊となつて、行人征馬のゆくへの如し。

釣殿と申して、面白き所にて候、よく御覽候へ。ワキ、實にく面白き所にて候。また是れなる芝を見れば、扇の如く取り残されて候は、何と申したる事にて候ぞ。シテ、さん候是れは古此の所に宮軍の有りし時、源三位頼政合戦に打ち負け、扇を敷き、自害し果て給ひぬ。されば名將の古跡なればとて、かやうに芝草を取り残して、今に扇の芝と申し候。ワキ、痛はしやさしも文武に名を得し人なれども、跡は草露の道の邊となつて、行人征馬のゆくへの如し。あら痛はしや候。シテ、げによく御弔ひ候ふものかな。なう其の宮軍の月も日も今日に當たりて候は如何に。ワキ、何と其の宮軍の月も日も今日に當たりたる候や。シテ、かやうに申せば我れながら、よそにはあらず旅人の草の枕の露の世に、姿見えんと來りたり。現とな思ひ給ひそとよ。地夢の浮世の中宿の夢の浮世の中宿の、宇治の橋守年を経て、老の浪も打ち渡す、遠方人に物申す、我れ頼政が幽靈

と、名のりもあへず失せにけり、名のりもあへず失せにけり。(申入)
 ワキ「さては頼政の幽靈假りに現はれ、我れに言葉を交はしけるぞや。
 いざや御跡弔はんと、歌思ひ寄るべの波枕、思ひ寄るべの波枕、汀も
 近し此の庭の、扇の芝を片敷きて、夢の契りを待たうよ、夢の契りを
 待たうよ。後シテ一聲血は涿鹿の河となつて、紅波楯を流す、世を宇治
 川の網代の波、あら闇浮戀しや。伊勢武者は、皆緋威の鎧着て、宇治
 の網代にかゝりけるかな。うたかたの、あはれ果敢なき世の中に、
 地、蝸牛の角の争ひも、シテはかなかりける心かな。詞あら尊の御
 事や。猶ほく御經讀み給へ。ワキ「不思議やな法體の身にて甲冑
 を帶し、御經讀めと承るは、いかさま聞きつる源三位の、其の幽靈に
 てましますか。シテ詞げにや紅は園生に植ゑても隠れなし。名のら
 ぬさきに頼政と、御覽ずること恥かしけれ。唯だく御經讀み給
 へ。ワキ「御心やすく思召せ。五十展轉の功力だに、成佛まさきに疑ひ

なし。ましてや是れは直道に、シテ弔ひなせる法の力、ワキ「合ひに合
 ひたり所の名も、シテ平等院の庭の面、ワキ「思ひ出でたり。シテ佛在世
 に、地佛の説きし法の場、佛の説きし法の場、こゝぞ平等大慧の、功力
 に頼政が、佛果を得んぞありがたき。
シテ「今は何をかつゝむべき、是れは源三位頼政、同「執心の波に浮き沈
 む、因果の有様現はすなり。サシ地抑、治承の夏のころ、よしなき御謀
 叛を勧め申し、名も高倉の宮の内、雲居のよそに有明の、月の都を忍
 び出でて、シテ「憂き時しもに近江路や、地三井寺さして落ち給ふ。クレ
 「さる程に、平家は時を廻らさず、數萬騎の兵を、關の東に遣すと、聞く
 や音羽の山續く、山科の里近き、木幡の關をよそに見て、こゝぞ憂き
 世の旅心。宇治の河橋打ち渡り、大和路さして急ぎしに、シテ「寺と宇
 治との間に、地關路の駒のひまもなく、宮は六度まで御落馬にて、
 煩はせ給ひけり。是れは先の夜御寢ならざる故なりとて、平等院

群れゐる村鳥の、翅を並ぶる羽音もかくやと白波に、ざつざつと打ち入れて、浮きぬ沈みぬ渡しけり。

にして、暫らく御座を構へつゝ、宇治橋の中の間引き離し、下は河波上に立つも、共に白旗を靡かして、寄する敵を待ち居たり。
シテかくて源平の兵宇治川の南北の岸に打ち浮かみ、鬨の聲矢叫の音波にたぐへておびたゞし。地味方には筒井の淨妙一頼法師、橋の行桁を隔て、戦ふ。橋は引いたり水は高し。さすが難所の大河なれば、左右なう渡すべきやうも無かつし處に、田原、又太郎忠綱と名のつて、宇治川の先陣我れなりと、名のりもあへず三百餘騎、地轡を揃へ河水に、少しもためらはず、群れゐる村鳥の、翅を並ぶる羽音もかくやと白波に、ざつと打ち入れて、浮きぬ沈みぬ渡しけり。
シテ忠綱兵を下知してはいはく、地水の逆巻く所をば、岩ありと知るべし、弱き馬をば下手に立て、強きに水を防がせよ。流れん武者には弓筈を取らせ、互に力を合はすべしと、唯だ一人一人の下知に依つて、さばかりの大河なれども、一騎も流れず此方の岸に、をめていてあ

歸るとて失せにけり。立ち歸るとて失せにけり。

此の一章の句讀は『平家物語』の語り本を参照した。

がれば味方の勢は、我れながら踏みもためず、半町ばかり覺えずしさつて、切先を揃へて、こゝを最期と戦うたり。さる程に入り亂れ、我れもくゝと戦へば、シテ頼政が頼みつる、地兄弟の者も討たれければ、シテ今は何をか期すべきと、地唯だ一筋に老武者の、シテ是れまでと思ひて、地是れまでと思ひて、平等院の庭の面、是れなる芝の上に扇を打ち敷き、鎧脱ぎ捨て座を組み、刀を抜きながら、さすが名を得し其の身とて、シテ埋木の、花咲く事もなかりしに、身のなる果ては哀れなりけり。地跡とひ給へ御僧よ、假初ながら是れとても、他生の種の縁に今、扇の芝の草の陰に、歸るとて失せにけり。立ち歸るとて失せにけり。

〔實生流謡曲〕

二三 競が事

(平家物語)

明くる十六日
治承四年五月
高倉の宮
以仁王

京中の騒動な
めならず。

年頃日頃もあれ
ばこそありけ
め。

不思議の事を
みし給ひける。

人の世にあれば
とて、すゞろに
いふまじき事を
いひ、すまじき
をするはよく
よく思慮あるべ
き事なり。

明くる十六日、高倉の宮の御謀叛起こさせ給ひて、三井寺へ落ちさせ給ふぞやと申すほどこそありけれ、京中の騒動なめならず。抑もこの源三位入道頼政は、年頃日頃もあればこそありけめ、今年如何なる心にて謀叛をば起こされけるぞといふに、平家の次男宗盛卿の、不思議の事をのみし給ひけるに依つてなり。されば人の世にあればとて、すゞろにいふまじき事をいひ、すまじき事をするは、よくよく思慮あるべき事なり。たとへばその頃、三位入道の嫡子伊豆守仲綱のもとに、九重くじゅうに聞こえたる名馬あり。鹿毛なる馬の、雙なごなき逸物、乗り、走り、心むけ、世にあるべしとも覺えず。名をば木の下したとぞいはれける。

宗盛卿使者を立て、聞こえ候ふ名馬を賜はつて見候はばやと、のたまひ遣はされたりければ、伊豆守の返事には、さる馬をば持つて候ひしを、この程あまりに乗り疲らかして候ふ程に、暫らくいた

あつばれその馬
は一昨日も候ひ
し、昨日も見え
て候ふ、今朝も
庭乗りし候ひつ
る。

はらせむが爲めに、田舎いんじやへつかはして候ふと申されければ、さらんには力及ばずとて、その後は沙汰なかりけるが、多く並み居たりける平家の侍ども、あつばれその馬は一昨日も候ひし、昨日も見えて候ふ、今朝も庭乗りし候ひつるなど、口々に申しければ、さては惜しむござんなれ、にくし、乞へとて、侍して馳せさせ、文などして、一時ひとときが中に五六度、七八度など乞はれければ、三位入道これを聞き、伊豆守に向つて宣ひけるは、たとひ金かねを以てまるめたる馬なりとも、それほど人の乞はうずるに、惜しむべきやうやある。その馬速かに六波羅へつかはせよとこそこのたまひけれ。伊豆守力及ばず、一首の歌を書き添へて、六波羅へつかはさる。

戀しくは來ても見よかし身に添ふる
かげをばいかゞ放ちやるべき

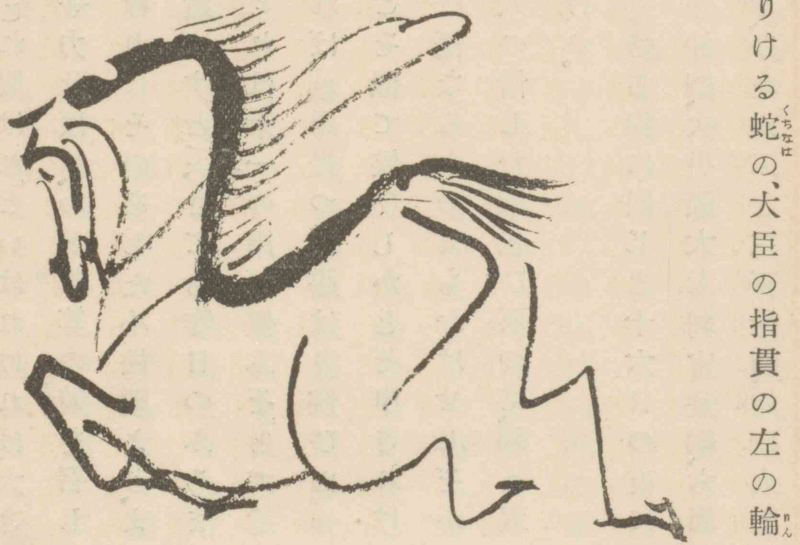
宗盛卿、まづ歌の返事をばし給はて、あつばれ馬や、馬はまことに

よい馬でありけり。されどもあまりに惜しみつるが憎きに、主が
 名乗を金焼かねやきにせよとて、仲綱といふ金焼をして、既にこそ立てられ
 けれ。客人きやくん來たりて、聞こえ候ふ名馬を見候はばやと申しければ、
 「その仲綱めに鞍おけ、引き出せ、乗れ、うて、はれ、なんぞぞ宣ひける。
 伊豆守この由を傳へ聞き給ひて、身に代へて思ふ馬なれども、權威
 について取らるゝさへあるに、剩へ天下の笑はれ種くさとならんずる
 事こそやすからねと、大きに憤られければ、三位入道宣ひけるは、な
 てふ事のあるべきと思ひ悔つて、平家の人どもが、斯様のしれごと
 をするにこそあんなれ。その儀ならば命生きても何にかはせむ、
 便宜べんぎを窺ふにこそあらめと宣へども、私わたくしには思ひも立たれず、高倉
 宮を勧め申されけるとぞ、後には聞こえし。

小松の大臣
平重盛

これにつきても天下の人、小松の大臣おとどの事をぞ偲び申しける。
 ある時大臣參内の序に、中宮の御方へ參らせ給ふに、八尺ばかりあ

弓場殿
校書殿(此の中
に藏人所、右兵
衛陣、校書所な



りける蛇くちやへの、大臣の指貫の左の輪りんを這ひ廻りけるを、重盛騒がば女
 房達も騒ぎ、中宮も驚かせ給ひ
 なんずとおぼしめし、左の手に
 て尾をおさへ、右の手にて頭を
 取つて、直衣の袖の中へ引き入
 れ、ちつとも騒がず、つい立つて、
 「六位や候ふ、六位や候ふ」と召さ
 れければ、伊豆守仲綱、その時は
 未だ衛府の藏人にて候はれけ
 るが、仲綱と名乗つて參られた
 るに、この蛇をたぶ。賜はつて、
 弓場殿ゆばのどのを経て、殿上の小庭に出
 てつゝ、御倉みくらの小舎人を招きて、

どあり、この殿の東北に弓場あり。

昨日のふるまひこそ、優にやさしう候ひつれ。

「これ賜はれ」といはれければ、大きに頭を振つて逃げ去りぬ。伊豆守力及ばず、わが郎等の競を召してこれをたぶ。賜はつて捨て、げり。そのあした小松殿より、よい馬に鞍おいて、伊豆守のもとへ遣はすとて、さても昨日のふるまひこそ、優にやさしう候ひつれ。これは乗一の馬で候ふぞ」とて遣はさる。伊豆守、大臣の御返事なれば、御馬畏つて賜はり候ひぬ。さても昨日の御振舞は、還城樂にこそ似て候ひしかとぞ申されける。いかなれば、小松殿はかやうに優なるためしもおはせしぞかし、この宗盛卿はさこそなからめ、人の惜しむ馬乞ひ取つて、剩へ天下の大事に及びぬるこそうたてけれ。

ひたかぶと三百餘騎。

さる程に同じき十六日の夜に入つて、源三位入道頼政、嫡子伊豆守仲綱、次男源大夫、判官兼綱、六條藏人仲家、その子藏人太郎仲光以下、ひたかぶと三百餘騎、館に火をかけ焼き上げて、三井寺へこそ參

年頃の侍。

相傳の主。

自然の事も候はば、眞先かけて命を奉らん。

先途後榮を存じて、當家についで奉公せむと思ふ。

「競はあるか」「候ふ」「あるか」「候ふ」

られけれ。こゝに三位入道の年頃の侍に、渡邊源三競の瀧口といふ者あり。馳せおくれて止まりたりけるを、六波羅へ召して、など汝は相傳の主三位入道が供をばせて、止まつたるぞ」と宣へば、競畏つて申しけるは、日頃は自然の事も候はば、眞先かけて命を奉らんとこそ存ぜしか。今度はいかゞ候ひつるやらん、かうとも知らせられざりつる間、止まつて候ふと申す。宗盛卿、これにもまた兼參のものぞかし。先途後榮を存じて、當家について奉公せむと思ふ。また朝敵頼政法師に同心せむと思ふ。ありのまゝに申せとこそ宣ひけれ。競涙をはらくと流いて、たとひ相傳のよしみ候ふとも、いかなか朝敵となれる人に、同心をば仕り候ふべき。ただ殿中に奉公致さうずるにて候ふと申しければ、大將、さらば奉公せよ。頼政法師がしけむ恩にはちつとも劣るまじきぞ」とて入り給ひぬ。朝より夕に及ぶまで、競はあるか、「候ふ」「あるか」「候ふ」と

心にくうも候はず。

伺候す。

日もやうく暮れければ、大將出でられたり。競畏つて申しけるは、まことや三位入道は、三井寺にと聞こえ候ふ。定めて夜討などにもや向はれ候はんずらん。三位入道の一類、渡邊黨、さては三井寺法師にてぞ候はんずらん。心にくうも候はず、罷り向つて擇り討ちなども仕るべきに、さる馬を持つて候ひしを、このほど親しい奴めに盗まれて候ふ。御馬一疋下し預り候はばやと申しければ、大將、尤もさるべしとて、白茸毛なる馬の、南籙とて祕藏せられたりけるに、よい鞍おいて競にたぶ。賜はつて宿所に歸り、はや日の暮れよかし、三井寺へ馳せ参り、入道殿のまつさきかけて討死せんとぞ申しける。

日もやうく暮れければ、妻子どもをば彼處此處に立ち忍ばせて、三井寺へと出で立ちける、心の中こそ無慙なれ。平紋ひらもんの狩衣の

「競はあるか」「候はず」

勝れたる大力の剛の者、矢つきはやの手きゝにてあり。

菊綴おほらかにしたるに、重代の着長緋緘の鎧着て、星白兜の緒をしめ、いかものづくりの太刀を佩き、二十四さいたる大黒の矢負ひ、瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽ではいだりける的矢、一手ぞさし添へたる。滋藤の弓持つて、南籙に打乗り、乗替一騎うち具し、舍人男に持楯脇挟ませ、屋形に火かけ焼きあげて、三井寺へこそ馳せたりけれ。六波羅には、競が屋形より火出て來たりとて、犇めきけり。宗盛卿いそぎ出て、競はあるか「候はず」と申す。「すは奴めを手延びにして、たばかられぬるは。あれ追つ懸けて討て」とのたまへども、競は勝れたる大力の剛の者、矢つきばやの手きゝにてありければ、二十四さいたる矢では、まづ二十四人は射殺されなんず。音なせそとて、進む者こそなかりけれ。

只今しも三井寺には、渡邊黨寄りあひて、競が沙汰ありけり。「如何にもしてこの競瀧口をば、召具せられ候はんずるものを」と、口々

に申されければ、三位入道競が心を能く知つて宣ひけるは、無下にその者捕へ搦められはせじ。入道に志深き者なれば、見よ、只今参らうずるぞ」と宣ひも果てぬに、競つと参りたり。「さればこそ」とぞ宣ひける。競畏つて申しけるは、伊豆守殿の木の下がかはりに、六波羅の南鐐をこそ取つて参つて候へ。参らせ候はんとて奉る。伊豆守殿斜（まが）ならず悦び給ひて、やがて尾髪を切り、金焼をして、その夜六波羅へ遣はさる。夜半（ま）ばかりに、門の内へ追ひ入れたりければ、厩に入つて、馬どもと嚙（か）ひ合ひければ、その時舍人驚きあひ、南鐐が参つて候と申す。宗盛卿急ぎ出て給ふに、昔は南鐐今は平宗盛入道といふ金焼をこそしたりけれ。大將につくい競めを斬つて捨つべかりけるものを、手延びにして謀られぬることこそ安からね。今度三井寺へ寄せたらんずる人々は、如何にもして競めを生捕にせよ、鋸（のこぎり）で首斬らんと、躍りあがり躍りあがり怒られけれども、

南鐐が尾髪も生ひず、金焼もまた失せざりけり。

二四 理想的生活

大 西 祝

生物は世界の花なり。彼等は生れて死せざるを得ず。其の齢を云ふ、何ぞ巖石と比すべけむ。何ぞ彼等のはかなきや。譬へば、花の散り易きが如し。散らざる、うつろはざること云ふ、幹根の花にまさること萬々、而も花は是れ草木の極美ならずや。生物は物界の花なり、うつろひ易き花なり。

然れども亦生物は皆造化主なり。樹木の種子は、水土を造化して樹木となす。桃李の生活は桃李の形なき所より桃李を造化し出だすにあり。犬馬の生活は犬馬の形なき所より犬馬を造化し出だすに在り。宇宙にかの所謂造物主ありや否やを知らず、又宇

宇宙にかの所謂

造物主あるや否やを知らず、又宇宙は一大生物なるや否やを知らず、但だ知る、生物の各自皆造化主なることを。

此の經驗界に、此の現象界に理想界を造り出だすが吾人の職分なり。理想界の造化主たるが吾人の眞個生活なり。

行けど〜到らぬ空をしたひてもぼるや人の心なるらむ 操山

宙は一大生物なりや否やを知らず、但だ知る、生物の各自皆造化主なることを。

吾人は有自覺的、有理想的生物なり。吾人の理想は理想界を造り出だして之れを現實界となすに在り。即ち此の經驗界に、此の現象界に、理想界を造り出だすが吾人の職分なり。理想界の造化主たるが吾人の眞個生活なり。吾人みづから造化し出だすにあ



大西祝筆蹟

らずば、吾人の世界に何時か理想の實現を期す可けん。吾人を措いて、誰れか此の人界に於ける理想の造化主たる者ぞ。手を束ねて天に之れを成就せしめ給へと呼ぶとも、天は答へざる可し。耶蘇基督よ、阿彌陀佛よと呼ぶとも、耶蘇何かせん、阿彌陀佛何かせん。

理想を實現するの責任は、天にあらず、神にあらず、吾人にあり。吾人の働くことに於いて働く者を神と云はずば、如何なる神によりてか能く理想を實現せしめん。生物は物界の花、理想的生活は生物界の花なり。

花はうつろひ易し。生物は死し易し。曾て吾人の理想を實現せしめたるものも永久なる能はず。見て造り出だしたるものも、今は既に老朽して更に改造されんことを要す。改造して更に改造せざる可からず。空間時間を以て裏まれたる吾人の成就し得る理想は、到底するに圓滿なる能はず、故に改造は窮まりなかる可し。吾人の世界に永久のものあるなし。但だ永久なるは進んで止まざる理想的改造のみ。此の無窮の理想的生活こそ吾人の眞個の生活なれ。

『大西博士全集』論文及び詩歌

二五 倫敦の二大記念

高田早苗

高田早苗
法學博士
貴族院議員
前早稻田大學總
長
號は半峰
東京の人
萬延元年生
Parliament
Westminster
Abbey

その久しい憧れ

大正三年五月十二日。早く起きて、旅館の高い窓から朝の倫敦市を瞰下した。同時に今迄經驗したことのない程の愉快を感じた。見よ、正面にはパーリメント(英國議會)其の右にはウェストミンスター、アビー、この英國に於ける偉大なる記念の二大建築が、相並んで我が前に空高く聳えて居るではないか。

私は永らく英國の憲法や憲政史や一般歴史を研究して居たので、世界に於ける國會の鼻祖であり、又模範でもある、此の國のパーリメントの事は、殆んど夢寐の間も忘れることがなかつた。従つて、今度洋行して英國に行くからには、第一にそれを見ようと深く心に期して居たのであつたが、その久しい憧れの雄姿を、着いた翌

の雄姿を、着いた翌朝の、始めて見る倫敦の空に見出だしたのは、實に豫想外でもあり、又限りなき悦びでもあつたのである。

Washington
Living
(173-1859)
アメリカの文學者

着後第一日の倫敦の空に於いて思ひ設けぬ對面をした。



高田早苗
高田早苗
アーヴィングのウェストミンスター、アビー詣での名高い文章には深く打たれて、折もあらば自分も何時か一度

朝の、始めて見る倫敦の空に見出だしたのは、實に豫想外でもあり、又限りなき悦びでもあつたのである。ウェストミンスター、アビーに對しては、私は更に趣味の上の憧憬をも感じてゐた。私は英國史を讀み、英文學史を繙く毎に、此の名高い古刹に眠つて居る英雄、豪傑、又は大詩人、大文豪に對して血を沸かした事が幾度あつたか知れぬ。殊にワシントン、アーヴィングのウェストミンスター、アビー詣での名高い文章には深く打たれて、折もあらば自分も何時か一度はと希つて居たが、是れ亦、着後第一日の倫敦の空に於いて思ひ設けぬ對面をしたのである。我が悦びは察せられるであらう。

Poets' Corner
Statesmen's Corner

私は其の日取敢へず、此の大寺院に參詣した。此の寺で私の最も深い興味を以て見たのは、豫て聞いて居たポーエツ、コーナーとステーツマンズ、コーナーとであつた。前者は傑出した詩人を葬つた所、後者は有名な政治家を葬つた所である。元來英國でウエストミンスター、アベーに葬るといふ事は、國家が其の政治家や文豪の生前の功勞を認めて、特に其處に埋葬するといふのである。従つて此の寺に葬られるのは、つまり其の人の偉大なる事を證明



(一タスニトスエウはるの見に後の塔高端左) トンメリーバ

する所以になるのである。

かやうな所から、此の寺に詣でるまで、私は普通日本流の考で、其處には其の人々の立派な墓標でも建てゝある事と思つてゐたが、實際を見て驚いた。事實は、我々が歩く石疊の下に、其等の人達の遺骸が葬られてあるので、其の上の石疊に、ほんの一寸、誰々を此處に葬るといふことが彫り付けてあるに過ぎないのである。即ち私は知らず／＼其の人々の墓の上を蹂躪して居たのであつた。尤も處々には其の文豪や政治家の名の彫刻されたのが見えるものもある。けれどもそれは一寸氣が付かないので、學生時代の昔から最近まで、其の人の著作を読み、或は傳記を読んで、心から憧憬したところの人、或る意味から言へば恩人でもあり、崇敬の標的であつたとも言へる人達の遺骸の上を踏んで居たのかと氣が付くと、知らぬ事ながら、まことに濟まぬやうな、勿體ないやうな心地がし

たのであつた。

英國の議會即ちパーリメントへは、三度ばかり行つて見た。一度は議事のない日で、幸ひに靜かに其の内部を見せて貰ふことが出来た。

英國の議會は、一つの建物の内の、向つて右の方に貴族院があり、左の方に庶民院がある。由緒の古い建物で、不便極まる事は勿論且つ議員全部が出席すれば、とても入り切れないといふ程の狭いものである。尤も投票の場合に議員を残らず驅り出すといふやうな事は、英國の議會には滅多に無いことかも知れぬが、普通の場合でも、政府黨又は反對黨の首領達がベンチに腰かけて居るだけで、陣笠連は、大概立つて居るといふ状態だといふことである。

英國の議會には演壇がない。議長の右の前席がトレジュアリ

Treasury Bench.



—ベア、—タスンミトスエウ

ウェストミンスター、アベ

ウェストミンスター、アベは英吉利隨一の大寺院である。遠く十一世紀の昔エドワード、ザ・コンフェッサー王の建立に始まり、次第に増築改造されたもので、キクトリア街に面して立つてゐる。この大塔は高さ百〇三尺、ゴート式の建築で、一七四〇年に出来たものである。ウイリアム王以來、代々國王の戴冠式場となり、王、王族、及び國家に功勞のあつた政治家、詩人などが、特に選ばれて、こゝに葬られることになつてゐる。政治家としては兩ビット、フォックス、パーマーストーンなどが葬られ、有名なボーエン、コーナーにはチャーサー、スペンサー以下テニスンに至る古來の詩人文豪が眠つてゐる。

Opposition Bench

一、ベンチと稱して政府黨首領の席、其の左側がオツポジション、ベンチと呼んで反對黨首領の席である。元來英國の議場は細長く出来て居るが、其の兩ベンチの間は實に狭い。で、政府の大臣も、反對黨の首領も、自席から自説を述べ、また反對者の説を攻撃するやうになつて居る。我が國の様に、議長席と演壇との左右に事々しく國務大臣と政府委員の席を設けるやうなことは、素よりないのである。

Parmerstone

(1784-1865)

Gladstone

(1809-1898)

Debate

さういふ次第であるから、其の昔パーマーストンが徹宵の大演説を試みたとか、グラッドストーンが愛蘭土自治案に就いて説明の大演説をしたとかいふのも、我々には、何か、高い處から大見えを切つて、長廣舌を揮つた事の様に見えるが、事實はさういふ芝居掛つた事ではなかつたらしい。そして議會の演説の事を「デベイト」即ち討論といふが、其の座席の工合から見ると、成程討論といふの

がいかにも相應はしく思はれ、又態々演壇に上るのではないから、自然議員が聞くに堪へぬ様な拙い長演説をする機會が少なく、是れなら大分議事が捗取るであらうと、心竊かに思つたのであつた。私の倫敦に關する思出は雲の如く多い。こゝには文化的の意義と趣味とに富める唯だ二鎖を拾つたに過ぎぬ。

〔半峯昔ばなし〕

二六 都市美論

古都市が旅行者の心を惹く原因は、主として歴史的回想であつ

海外に遊んだ人は、多く新しい市街の美を説かうとはしない。専ら古都市の美を説くことを常とする。同じ傾向から、國內に於いてもまた、人々は第一に奈良、京都の美を擧げる。私は此の事に對して決して異議を挿むものではない。しかしながら、是等の古都市が旅行者の心を惹く原因は、主として歴史的回想であつて、そ

て、その一般施設の合理性や、線の變化や、立體の集合やから來る直觀の美ではない。

The City Crown

封建時代の都市は、發生上シチイ、クラウンに屬する。

の一般施設の合理性や、線の變化や、立體の集合やから來る直觀の、美ではない。故に一般都市美を論ずるに當たつて、吾々は先づ古都の美が特殊の範疇に屬するものである事を心にとめて置かねばならぬ。例へば、京都の美の如きは、歴史的の背景を取り去るならば、殆んど無價値で、單なる田舎景色の集合に過ぎぬものとなるであらう。周圍の山々の美しさを説く人もあらうが、あの位の風景は到る處に在る。俯觀の美はないでもないが、一方に於いておのづから氣宇の宏大を缺く憾みがある。朝鮮の京城がまたさうであるが、周圍の山々は京都より遙かに美しい。

封建時代の都市は、發生上謂はゆるシチイ、クラウンに屬するもので、中央に高く群を抜いて立つた宮城があり、それを核心として、其の周圍に聚落の群つてゐるのが多い。歐洲の古いカセドラルタウンに於いては、其の中央クラウンは、大寺がこれを形造つてゐ

大阪市の都市美。

Concrete

Skyline

Detail

大阪市の中心は中の島公園である。北濱から難波橋を渡りながら見る左右の眺めは、またなく美しいものである。左手の廣場の水に近く、コンクリートで平たく固めた築堤の上をば、曳舟の綱を肩にした船頭が通り、生垣を隔てた低い樹木の向う砂地の綺麗な運動場には、子供等が無邪気に遊んで居る。此處は洪水の折には水に漬かつて、一段高まつた所には、赤煉瓦の公會堂が立ち、其の背後には白い圖書館が立ち、それからスカイ、ラインを破つて市廳舎の塔が高く聳えて居るが、是等は悉く人工を以て作り上げられた線の變化と立體の集合とから成立つた美である。また橋の右手に低く突き出た島の尖端にも捨て難い趣があり、難波橋がまた相應に意匠を凝らされたものである。無論建築的デテールに就いては多少の申分もあるが、とにかくこれこそ眞に都市の美といふ

都市の眞の美は、その隅々まで、凡て人間の知識と人間の意志とによつて、有機的に作り上げられたものでなければならぬ。

べきものである。朝の靄によく、晝の光によく、夜の灯によい。洵に世界に於ける都市の美觀の一つである。私は此の全體のプランを立てた技術家の手腕に敬服する。其處には何等の歴史的回想もなく、何等の傳説をも容れずに、自由の計畫が表現されて居る。また、河や地勢を利用してはゐるが、自然の姿其のまゝから來る美と、これに伴ふ聯想とを主として居るのではない。

西洋に、田舎は神これを作り、都市は人これを作る。といふ諺がある。都市の眞の美は、その隅々まで、凡て、人間の知識と人間の意志とによつて、有機的に作り上げられたものでなければならぬ。勿論、公園や逍遙道や一般住宅地は、寧ろ天然物を多く取り入れて、不定形に作る事を要する。且つ其の方が、定形的に作られたる商業街と對比して、反映の美をなす所以ともなる。しかしながら、商業地の街衢に街路樹などの天然物をあしらふのは、唯だ餘りに引き

締められた建築觀を柔らげる爲めに、點景として添へられるだけのもので、私は寧ろ或る街衢には、何等の天然物をも入るゝ事なく、幾何學的堆體の集團のみに依つて特殊の美をなさしむる部分の存在する事を希望するものである。

歐洲の都市にも、巴里を別として、住宅地域の外に街路樹のあるところは極めて少ない。まして我が東京の市街のやうに比較的狭い街路に樹木を植ゑようとする所は、殆んどないと云つてよい。概して、西洋の諸都市では、住宅地域には街路樹を植ゑ、商業地域には植ゑぬやうになつて居るのに、如何なる故か、日本のは全くこれと反對である。

それから都市に必要なものは廣場である。古代の都市に於いては、市民は主要建築を以て圍まれた中心廣場に出て、神殿に詣で、ニュースを交換し、其の日の事務を處理し、取引を濟まし、市政演

News

Exedra

露天の腰掛

Forum

民衆集會の廣場

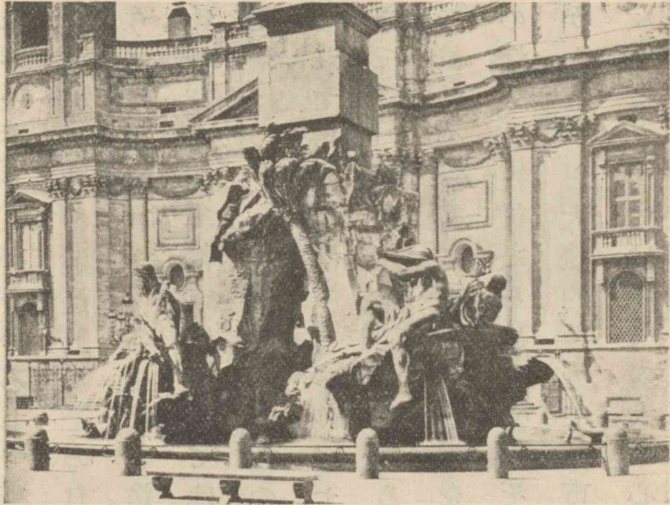
Piazza

歩廊廣場

説を聞き、各種の競争をなし、入浴に身心の疲勞を一掃してからは、エキセデレに腰をおろして、街巷を眺め、名士の立像や美しき記念柱などの間を逍遙して、その日々の全體を其處で送るといふやうに、所謂フォーラム生活を送つたものである。中世紀から文藝復興期の商業都市に於いては、フォーラムがピヤツアや市場やに代はつた。そしてそれらの周圍がどんなに美しい建物で取圍まれて居たかは、エニスのピヤツアやブラッセルの市場が、今もなほ昔のまゝに物語つてゐる。現今に於いても、地方の小都市は猶ほ此の計畫に従つて廣場を設けて居るが、大都市に於いては、その活動の複雑なる事が到底その設置を許さなくなつて來た。しかしながら大體的に見て、都市の中心はこれに存するので、都市の状態によつては、中央の大中心地の外に或る數の小中心を置き、其の間に主従の關係をつけて、一般計畫の上にも、美觀の上にも、立派

な統一をつけることになつて居るのである。

中心地の廣場に必要なものは水である。湛へられた清冽なる水ほど人の心を澄ますものはない。滑らかに動いてる水ほど人の心を柔らげるものはない。勢鋭く噴出する水ほど人の心に潑刺たる快感を起こさせるものはない。霧となつて飛散する水沫ほど人の心を軽くするものはない。跳噴の餘勢散じては霧に虹を宿し、球と凝つては盤に落ちて蓄水の面を打ち、溢れては滑かに盤縁をなめて第二の水盤に注ぐ。



(作ロゼンラケミ)水噴のマ-ロ

し、球と凝つては盤に落ちて蓄水の面を打ち、溢れては滑かに盤縁

湛へられた清冽なる水ほど人の心を澄ますものはない。滑らかに動いてる水ほど人の心を柔らげるものはない。勢鋭く噴出する水ほど人の心に潑刺たる快感を起こさせるものはない。霧となつて飛散する水沫ほど人の心を軽くするものはない。跳噴の餘勢散じては霧に虹を宿し、球と凝つては盤に落ちて蓄水の面を打ち、溢れては滑かに盤縁をなめて第二の水盤に注ぐ。

を嘗めて第二の水盤に注ぐ。此の魔術的光景は、如何に幾何學的諧調を主とした是等の廣場にふさはしいものであらうか。噴泉の美は、これを木立の間に眺めるよりも、登や鋪石にたゞまれた大地に於いて、石や煉瓦の建物を背景として観る方がよい。倫敦から巴里に移つて、その噴泉の美觀に驚く人は、更に羅馬に遊んで其の驚きを深くするであらう。都市の廣場に噴泉は、缺く可からざるものである。さうして廣場の噴泉の意匠は、大體に於いて建築的形態を取り、これに人像や動物の形をあしらつた方がよい。また噴泉の大きさと水量とは、廣場の大きさに比例して作らねばならぬが、廣場に比して小さきに過ぎるよりは、寧ろ大いなるに過ぎた方がよい。又噴泉は晝の賑ひに相應はしいのみならず、夜間電燈の下に、水滴を聞き、飛沫を眺めるに相應はしいやうに作られねばならぬ。

吾々が少年時代に讀んだ小學讀本には、東京の繁華を説いて「電線は蜘蛛の網の如く」と書いてあつた。それは當時にあつては物珍しかつたに相違ないが、今日に於いては、甚だ笑ふべき話で、蜘蛛の網の電線と無作法に突立つて居る電柱とは、非常に市民を苦しめ、市の美觀を傷つけて居る。これらは速かに地下線に改められねばならぬ。同時に各種の地下埋設物は、大暗渠の中に整理せられなければならぬ。

また電車は總べて架空線を廢して地下線式に改める。若しそれが不可能ならば、或る種のもを地下電車に改めて、他をば自動車に以て代辨せしむる。その上に、街路を走る自動車の總べてを、不愉快な音響を發せぬ電気自動車にする。かうする事が出來れば、どんなに愉快な事であらう。又斯く整理せられたる路面を、土瀝青を以て鋪裝し、夜間交通の少なき時刻に於いて清淨に之れを

電車と街路面。

純建築的美觀と
自然の風景との
對立があつて、
大都市の眞の面
目が保たれる。

水洗し、晴天には鏡の如く人馬の影を垂直に路面に投映する事が出來たならば、どんなに美しい事であらう。整理と清淨とは實に都市美觀の重要な要素である。

以上は概して純建築的美觀を主とした地區について述べたのであるが、之れと相並んで自然の風致を豊かに與へた住宅地、公園、逍遙道、河畔等の對立があつて、大都市の眞の面目が始めて保たれる可きであらう。住宅地は、商工業地域が平坦なるを要するのと違つて、多少の坂路を有する方が却て趣がある。そして其の街路に接しては、樹木や芝生や花壇やに意を用ゐる事を要する。我が國の都市には公園が甚だ少ない。其處には更に多くの大小公園が設けられねばならぬ。そして或る種の大公園の間には、並木の見事な逍遙大道の設けられる必要がある。河川の岸には、所々に當然荷上場が設けられるであらうが、その間には是等の混雜を隠

大都市美に工場
地の偉觀を伴は
しむる必要。

すべき美しい河畔園が作られねばならぬ。
純建築美を主とする地域と、自然の風趣を主とする地域との外に、大都市にはなほ蒸氣が盛んに立ちのぼり、大起重機が空高く動き、鐵槌の音が力強く響いて、熱火の光の赤く窓に映ずる工場地の偉觀が伴ふべき筈である。工場建築の美化は、近頃頻りに唱へられ、且つ實現せられつゝあるが、工場建築のみならず、更に地上の工作物一切の美化が行はれねばならぬ。都市全般の美化、是れは實に現代的精神の強き顯はれである。それには如何なる部分にも、寸毫の不整頓、不合理、若しくは不快なる形態、不調和なる色彩なからしめ、都市全體をして一の立派な美術的建築物たらしめることを要する。

近代都市計畫の本場といはれた戦前の獨逸の諸都市は、極端に美觀を重要視して居た。其等の諸都市は、公共藝術や街衢の壯麗

都市美成立には
市民の妥協心を
必要とする。

をば、恰も産業の資本の如くに見て、市の美觀を増すことを市の發展上缺く可らざる事として居たと云つてもよかつた。市民はまた演奏場、劇場、花園、美術館、博物館等に對する支出に不賛成を唱へぬのみならず、街路を飾り、銅像を建て、噴泉、時計塔等を増設する事に悦んで協力した。従つて、其等の都市に見る橋梁、停車場、其の他の公共建築物は、如何に小さなものでも、悉く甚大の注意を以て意匠せられた美術的産物であつた。そして彼等は斯くする事に依つて、其の人口が増殖し、商業が發展すると深く信じて居たが、事實これによつて健全なる移住者を増し、又觀光客を引き付けた。斯くの如くにして都市は益、發展し、産業は益、盛んになり、地價は上騰し、市の収入は増加し、而して他の一方に於いて、市民の稅率は低下した。市中は整頓してゆとりが付き、美しくなり、また演劇、演奏をはじめ、あらゆる高尚な娛樂機關が備はつた爲めに、それが觀光客

都市の美觀の必要。

佐藤功一
工學博士
東京の人

を歡ばしめたのみならず、同時に市民に慰安を與へて、大いに其の教化に役立つた。獨逸の勞働者の功程が一段抽んでてゐた原因の一つは、此の慰安の機關と精神的娛樂との完備に基いて居たといはれる。

都市の美觀が市民の慰安の上にも、健康の上にも、精神的向上の上にも、従つて風紀の上にも、經濟の上にも、いかほど重要なものであるかは、これによつて明らかに知られるであらう。

(佐藤功一の文に據る)

純正國語讀本 卷七終

昭和八年八月十七日發行
昭和七年十二月十四日發行
昭和七年十二月十四日發行
昭和七年十二月十四日發行
昭和七年十二月十四日發行
昭和七年十二月十四日發行
昭和七年十二月十四日發行

(新制版)

純正國語讀本 卷七

定價金 六十錢

不	覆
許	製

編纂者 五十嵐 力

發行者 早稻田大學出版部

代表者 武田 尾吉

東京市牛込區榎町七番地

印刷者 五十嵐 良晃

發行所 東京・早稻田 早稻田大學出版部

電話牛込三四五番・三四六番

